第４章　第９次調査の記録
（医療技術短期大学校舎増築地点）

第１節　調査の経過と概要

１　調査にいたる経緯

1992 年（平成４年）には医療技術短期大学校舎の増設が計画された。本校舎部分は 1987 年（昭和 62 年）に徳島県教育委員会文化課の担当のもとに実施された第７次調査地点であり、今回の建設予定地はその西側隣接地にあたる。そのため工事に先立つ埋蔵文化財の取り扱いが問題となり、1992 年３月に設けられた徳島大学埋蔵文化財調査委員会において医療技術短期大学部校舎増設に先立つ埋蔵文化財発掘調査体制が審議されることとなった。本委員会では同学に新設された埋蔵文化財調査室の担当のもとで発掘調査を実施することが決定され、調査担当者としては同年４月に着任した総合科学部助教授の東潮が任命された。また調査員としては、同年８月に助手１名を医学部解剖学第１講座付けで新規採用し、この任にあてることになった。

徳島大学医療技術短期大学部ほかの関係部局、徳島県教育委員会、財団法人徳島県埋蔵文化財センターをはじめとする関係機関、関係各位の協力をえて、発掘調査は 1992 年７月 11 日から開始し、９月４日に終了した（追加調査は９月 16・17 日の両日に実施）。地籍は徳島市蔵本町３丁目 18 番地の 15 であり、調査面積は 253㎡、追加調査地の面積は 57㎡である（図 53）。

２　調査組織

調査主体は徳島大学埋蔵文化財調査委員会（委員長 武田克之学長）であり、調査担当者は東潮（総合科学部助教授）、実地の調査員は北條芳隆（医学部助手）である。調査組織の構成については序章７・８頁で示したとおりである。なお現場の請負い業者は松村組・川田組である。

３　調査の目的と方法

調査地周辺でこれまでに実施されてきた徳島県教育委員会や徳島市教育委員会、および徳島大学による発掘調査結果をみると、調査地は庄・蔵本遺跡の中心部付近にあって遺構密度の比較的高いところであると推定された。これまでに検出された遺構や遺物は、縄文時代から中・近世までの長期にわたっており、遺構面としては３ないし４面が遺存する可能性が指摘されるところであった。そのため調査にあたっては、遺存する各遺構面を上層から下層へと順次調査することによって、時代ごとに遺跡の展開状況を把握し、慎重に記録保存することを目的とした。

図 53　調査地の位置

調査地は校舎建設予定部分と貯水槽新設予定部分と

に２分される。前者を北側調査区、後者を南側調査区とした。グリッドの設定は建設予定の建物主軸に沿わせて任意に設定した。南北両地区の調査グリッドは共通であり、１区画は３ｍ方眼である。

調査の方法は、客土ないし造成土の堆積が認められる現地表下約60ないし70㎝までを重機掘削とし、以下は人力掘削で行うこととした。

４　調査経過

７月10日、東潮立会いのもと重機による造成土の除去作業にはいる。15日には重機掘削を終了し、手掘り作業を開始。撹乱層（旧陸軍関係建築物基礎・病院関係建築物基礎）の除去作業を22日まで継続し23日から遺物包含層の掘り下げを開始、近世の遺構を確認したほか、各時代にわたる多数の土器片を採集。27日までには基本層序の認識を確定した。29日には南側調査区で古墳時代中期の溝を確認し、精査に入る。本遺構の調査は８月21日まで実施した。８月３日北條着任、遺構検出作業を継続。４日、台風接近のため暴風雨となり、翌５日は水抜き作業に追われる。以後８・９日、15・16日、18・19日と３回にわたり台風の接近に伴う暴風雨の被害を受けたために、調査は大幅に遅れることとなった。この間に近世から古墳時代までの遺構の掘り下げ・記録作業をほぼ終了し、20日には学内関係者向けに現地説明会を、翌21日には記者発表を実施した。

８月22日、弥生時代終末期の住居を検出し掘り下げを開始。27日には黄褐色シルト層中で石剣とおぼしき石製刺突武器１点と溝状の遺構を検出、遺構は弥生時代前期後葉のものとわかる。ひき続き検出された溝状の遺構に先行トレンチを設け掘り下げを実施したところ、弥生時代前期前葉の遺物を含む河道であることが判明した。河床部は現地表下2.7ｍの深さをもつ。そのため調査期間を１週間延長し、河道の規模の把握と遺物の取り上げなど、最低限の応急的処置をとることにした。南側調査区では28・29日の両日、黄褐色土層を掘り下げ、遺構がないことを確認。31日には河道の平面形全体の写真撮影。９月１日、試掘トレンチでの所見にもとづき灰色粘土層の直上までを重機掘削し、砂層の掘り下げにはいる。２日夕方になって木製の腰掛けが出土。４日には貯水槽付近で矢板列を検出。徳島県下では最古の資料である。矢板列は貯水槽の内側へと続くことを確認したため、貯水槽撤去時に追加調査が必要であると判断し、作業を一時中断。矢板列の既掘部分を保護したのち埋め戻し、機材を撤収。本調査を終えた。

関係者と協議の結果、追加調査は貯水槽撤去時の16・17日両日に実施することに決定。16日、北條

図54　調査前の状況

図55　調査風景

立会いのもと重機で粘土層直上までを掘削。17日、手掘りで砂層中の遺物検出作業、矢板列部分の精査を並行して実施。対岸にも矢板列が遺存することが判明した。取り急ぎ写真撮影・測量・取り上げを行い、追加調査を終了した。

第２節　調査の記録

１　基本層序と遺構の概要

今回の調査の結果､検出された遺構の主要なものを年代の古いものから列挙すると次のとおりである。

弥生時代前期前葉の旧河道（堰、杭列を施したもの）	1
弥生時代前期後葉の土坑	2
弥生時代終末期の住居	1
古墳時代中期の井戸	1
古墳時代中期の溝	1
中世の溝	2
近世の溝	1

また出土遺物の数量は次のとおりである。

土器類（瓦、陶磁器を含む）	コンテナ24箱分
木器類（種子等の植物遺存体を含む）	コンテナ10箱分
石器類（管玉を含む）	８点

遺構の数量は少ないが、調査面積の割には比較的多彩な内容である。特に弥生時代前期前葉の旧河道関連資料には注目すべきものがある。

これら各遺構の層位的関係は、調査地の基本層序とともに図56において模式的に示した。基本層序は下層から主に灰色粘土層、暗褐色シルト質粘土層、黄褐色シルト層、黒褐色シルト層の各堆積層からなっており、このうち黄褐色シルト層と黒褐色シルト層中に上記の諸遺構は掘り込まれている。各遺構の年代と照合させるならば、黄褐色シルト層の堆積時期は弥生時代前期後葉であることがわかる。

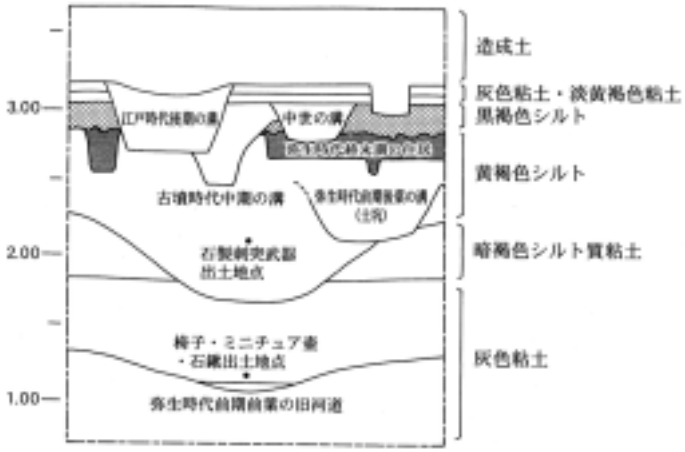
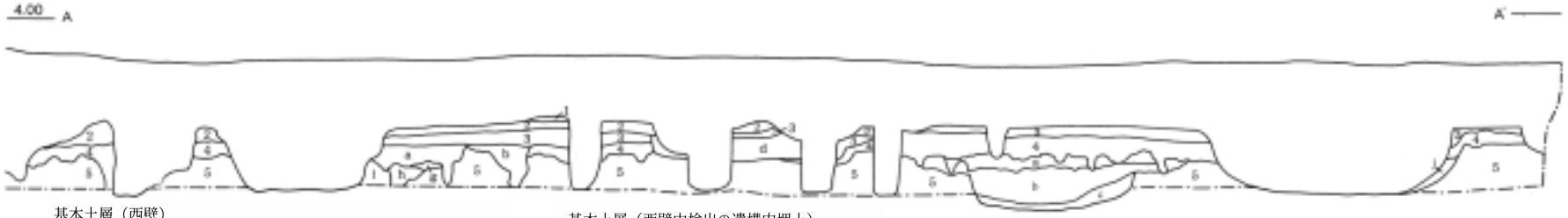


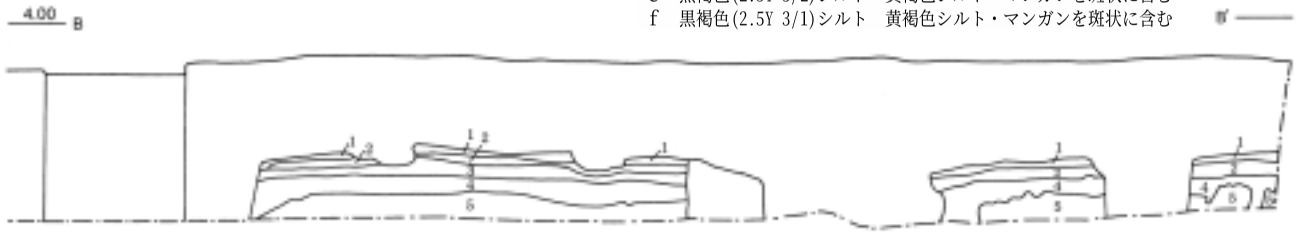
図56　基本土層と遺構

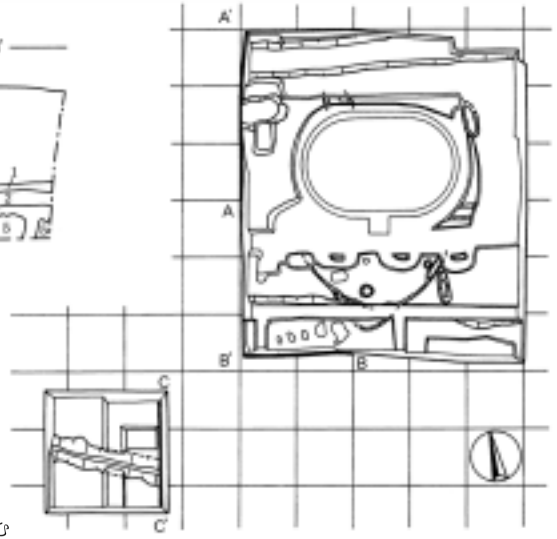
弥生時代前期前葉の旧河道は灰色粘土層の上部に認められ、掘り込み面は不確定的であったが、黄褐色シルト層が完全に覆う状態であったため、その下部であろうと推定した。また黒褐色シルト層は、色調の差を除けば黄褐色シルト層と同質であり、境界も漸移的である。そのため、本土層のすべてないし一部は黄褐色シルト層の上部面付近が土壌化と有機質の含有を受けた状態とみなすことも可能であり、その反面、肉眼観察では本層位をいくつかの堆積層に区



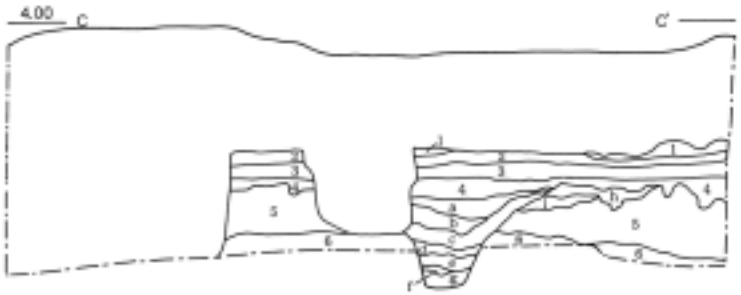
基本土層（西壁）
1　にぶい黄色(2.5Y 6/3)シルト質粘土
2　灰オリーブ色(5Y 5/3)シルト質粘土
3　黄褐色(2.5Y5/3)シルト質粘土
4　暗オリーブ褐色(2.5Y 3/3)シルト
5　黄褐色(2.5Y 5/3)シルト　黄灰色(2.5Y 5/1)シルトを斑状に含む

基本土層（西壁中検出の遺構内埋土）
a　オリーブ褐色(2.5Y 4/3)極細砂混じりシルト
b　オリーブ褐色(2.5Y 4/3)極細砂混じりシルト　a層より暗い
c　オリーブ褐色(2.5Y 4/3)シルト
d　灰オリーブ色(5Y 5/2)シルト質粘土
e　黒褐色(2.5Y 3/2)シルト　黄褐色シルト・マンガンを斑状に含む
f　黒褐色(2.5Y 3/1)シルト　黄褐色シルト・マンガンを斑状に含む
g　オリーブ黒色(5Y 2/2)シルト　黄褐色シルト・マンガンを斑状に含む
h　灰オリーブ色(5Y 5/3)シルト　黒褐色シルト・マンガンを斑状に含む
i　灰オリーブ色(5Y 5/3)シルト　黒褐色シルト・マンガンを斑状に含む
j　灰オリーブ色(7.5Y 4/2)極細砂混じりシルト





基本土層（南壁）
1　にぶい黄色(2.5Y 6/3)シルト質粘土
2　灰オリーブ色(5Y 5/3)シルト質粘土
3　黄褐色(2.5Y 5/3)シルト質粘土
4　暗オリーブ褐色(2.5Y 5/3)シルト
5　黄褐色(2.5Y 5/3)シルト　黄灰色(2.5Y 5/1)シルトを斑状に含む



基本土層（東壁）
1　鈍い黄色(2.5Y 6/3)シルト質粘土
2　灰オリーブ色(5Y 5/3)シルト質粘土
3　黄褐色(2.5Y 5/3)シルト質粘土
4　暗オリーブ褐色(2.5Y 3/3)シルト
5　黄褐色(2.5Y 5/3)シルト
　黄灰色(2.5Y 5/1)シルトを斑状に含む
6　暗灰黄色(2.5Y 4/2)シルト質粘土

基本土層（東壁中堅出の遺構内埋土）
a　暗緑灰色(10GY 4/1)シルト　酸化鉄・マンガン粒を含む
b　暗茶褐色シルト質粘土
c　暗茶褐色シルト質粘土
d　暗褐色シルト　黄褐色土を斑状に含む
e　黄褐色土を斑状に含む
f　暗オリーブ色シルト質粘土
g　黄褐色土を斑状に含む
i　暗黄褐色シルト

図57　調査区各所の堆積状況

分することも不可能であった。本層位には弥生時代中期以降、中世までの遺構・遺物が含まれており、この間の人間の営みによって土地の撹乱が重層的に進み、それらの影響を受けた範囲が黒褐色を呈することになったものと考えられる。

黒褐色シルト層の上部にはほぼ水平な不整合面があり、直上に淡黄褐色粘土層、灰色粘土層が形成されていた。これら粘土層は近世以降の水田耕土層であろうと推定される。

そして最終的には明治42年の旧日本陸軍による練兵場造成によって大規模な客土の堆積があり、今日の地形の基本的枠組みが決定されたという状態である。

２　弥生時代の遺構

(1)　旧河道

検出された旧河道は、北側調査区を南東から北西に横切る主流路と、南西側から主流路にほぼ直交して流れ込み、調査区中央部付近で合流する枝流路とがある（図 58）。主流路には２カ所にたち割トレンチを設け断面観察を行ったが、両岸の立ち上がりはどの箇所でも不明瞭で、主流路では流水部分を中心に幅約４ｍの範囲がゆるやかにくぼむ状態である（図 59）。主流路の流水部分の幅は2.1ｍ前後であり、この間には数枚の砂層が、粘土層を間層としてはさみながら平均12㎝の厚さで堆積していた。流水に

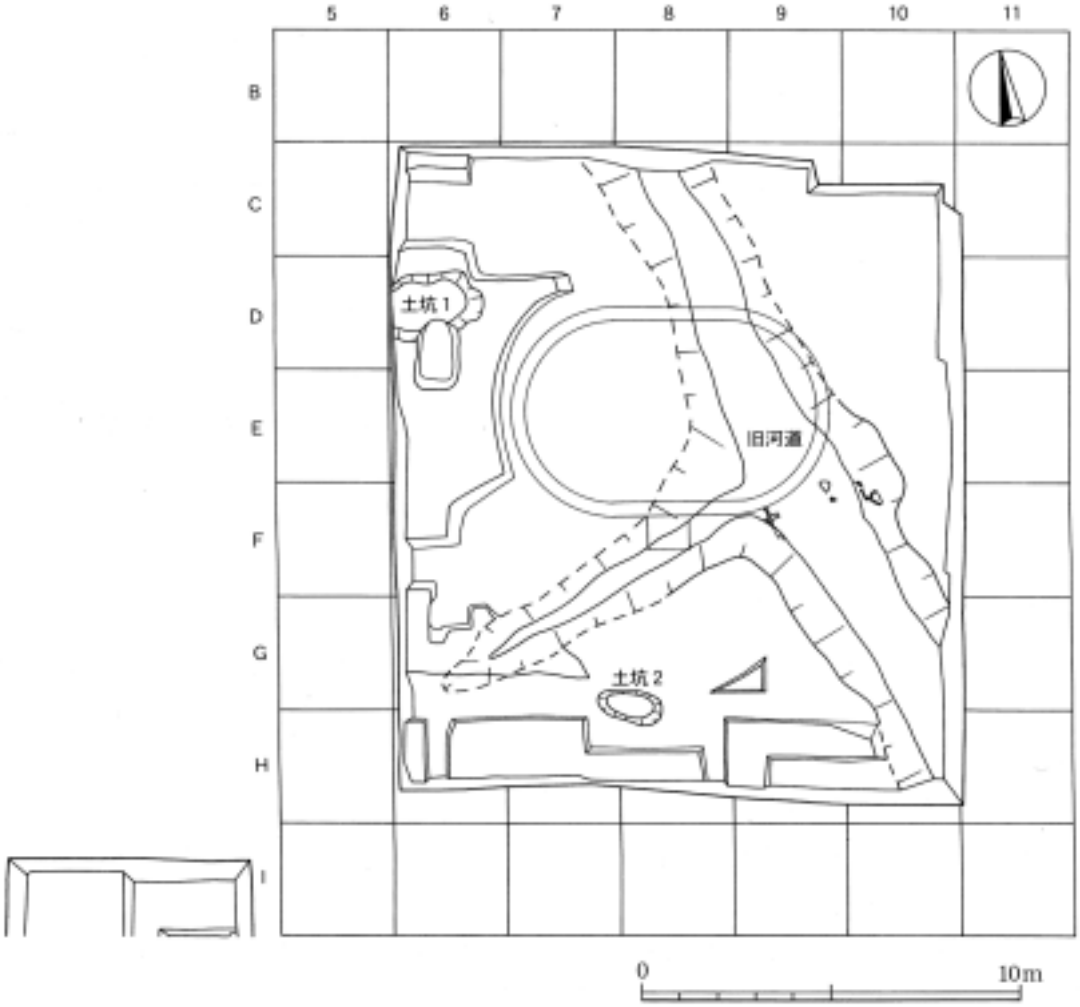
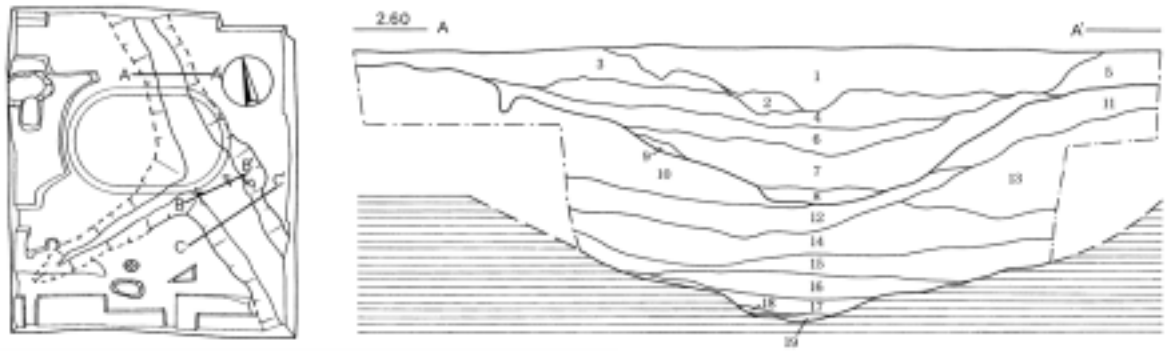


図 58　弥生時代前期の遺構配置



Ａ－Ａ’埋土
1　オリーブ褐色(2.5Y 4/3)極細砂ベースのシルト混じり　遺物をほとんど含まない
2　黄褐色(2.5Y 5/3)細砂・極細砂　遺物をほとんど含まない
3　黄褐色(2.5Y 5/4)シルトベースの極細砂混じり　遺物をほとんど含まない
4　黄褐色(2.5Y 5/3)シルトベースの極細砂混じり　遺物をほとんど含まない
5　黄褐色(2.5Y 5/3) 極細砂ベースの細砂混じり　遺物をほとんど含まない
6　オリーブ褐色(2.5Y 4/3)極細砂ベースのシルト混じり　遺物をほとんど含まない
7　黄褐色(2.5Y 5/3)極細砂・シルト　均質
8　オリーブ灰色(10Y 4/2)シルトベースの極細砂混じり　遺物をほとんど含まない
9　暗オリーブ色(5Y 4/3)シルトベースの極細砂混じり
10　オリーブ黒色(5Y 3/2)シルト　マンガンを含む
11　暗オリーブ色(5Y 4/3)シルト　マンガンを多量に含む
12　オリーブ灰色(10Y 4/2)シルト　純度高く、マンガンを含む
13　暗灰黄色（2.5Y 4/2)シルト　マンガンを多量に含む
14　灰色（青灰色)(10Y4/1)シルト質粘土
15　灰色（青灰色)(5Y4/1)シルト質粘土
　粘土をベースとし、シルトを50%程度含む
16　灰色砂礫（φ２㎜前後の砂粒）土器片・木器片を多量に含む
17　灰色（暗灰色）(5Y 4/1)粘土
18　灰色（N 4/0）砂層　φ１～1.5㎜前後の砂粒
19　灰色（5Y 4/1）粘土

Ｂ－Ｂ’埋土
1　砂層　土器を多量に含む
2　暗褐色シルト質粘土
3　砂層
4　灰色シルト・粘土
5　暗灰色粘土　遺物・有機物を含まない
8　やや明るい灰色シルト・粘土　木質を含む
9　灰褐色シルト質粘土

Ｃ－Ｃ’埋土
1　灰オリーブ色(5Y 5/3)シルトベースの極細砂混じり
　マンガンを多量に含む
2　灰オリーブ色(5Y 5/2)極細砂ベースの細砂混じり
3　灰オリーブ色(5Y 5/2)シルト　僅かに極細砂を含む
4　オリーブ灰色(10Y 4/2)シルト質粘土
5　暗灰黄色(2.5Y 4/2)シルト　暗褐色を呈する　マンガンを含む
6　暗灰黄色(2.5Y 4/2)シルト　暗褐色を呈する　マンガンを含む
7　灰オリーブ色(5Y 4/2)シルトベースの極細砂混じり
8　暗オリーブ色(5Y 4/3)シルト　マンガン・酸化鉄分を
　多量に含む　第６層より部分的に明るい
9　灰色(7.5Y 5/1)シルト質粘土
10　灰色(7.5Y 4/1)シルト質粘土　第９層よりシルトの比率は高い
11　オリーブ黒色(7.5Y 3/1)シルト　粘土を20%程度含む
12　灰色(10Y 4/1)粘土
13　灰色　砂層（φ１㎜前後の砂粒層による堆積）
　土器片・木片を含む
13' オリーブ黒色(5Y 3/2)シルト　マンガンを多量に含む
14　灰色(10Y 4/1)粘土
15　灰色　砂層（φ１㎜前後の砂粒層）

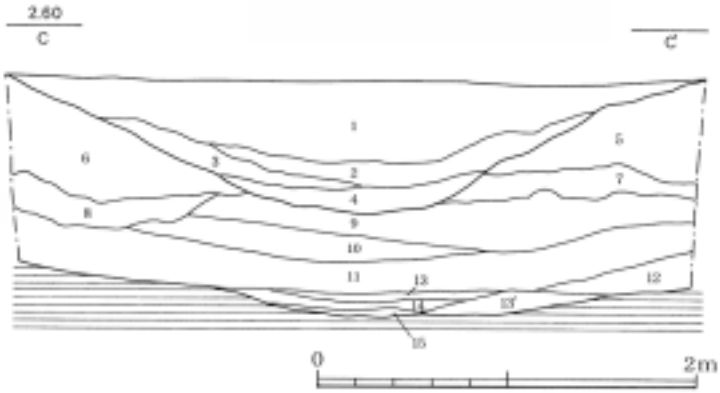


図 59　旧河道の堆積状況

よる堆積層の上を黄褐色シルト層が覆い、この堆積によって本流路はおおかた埋没したものと判断される。ただし堆積層の途中には緩やかな「U」字状を呈する不整合面が認められ、この面を境に上層と下層とに区分することが可能である。このような状況をみると、一旦は埋没した流路が再度溝として機能した時期があったらしい。

不整合面の上方からは石製刺突武器が１点出土したのみで、土器類の出土はなかった。そのため時期の判定にはやや不確定さがともなうが、層位関係からみると、再び溝として機能した時期は弥生時代前期後葉ではないかと推定される。

ふたつの流路の合流地点からは、主流路側の東西両脇で矢板列が検出された（図 60)。西側の矢板列は支流路の南側半分にかかる状態で２ないし３重に打ち込まれており、板の多くは主流路側に傾いていた。矢板列の打ち込まれた範囲は南北 80㎝、東西 25㎝ほどである。また東側の矢板列は西側のものと

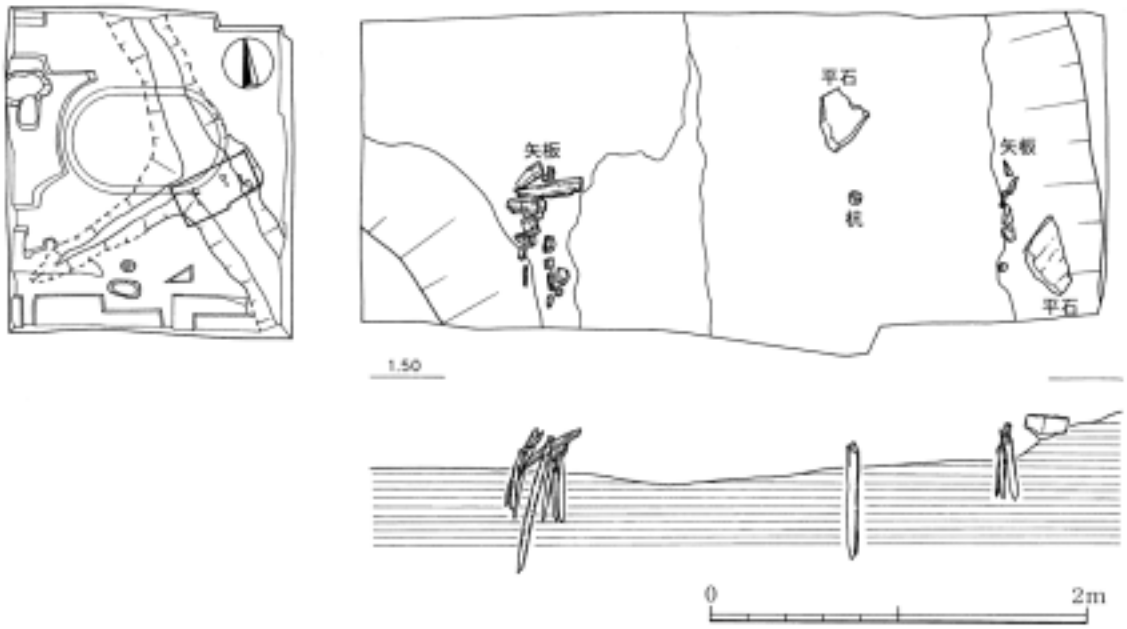


図 60　旧河道の矢板・杭列

図 61　旧河道の断面

図 62　旧河道の矢板列(東側)

対向する位置にあり、こちらは１列のみである。矢板の打ち込まれた範囲は南北60㎝で、西側の矢板列より短い。また合流地点の中央部分にはこれら矢板列とは別に、やや太めの丸木杭が１本打ち込まれていた。なお丸木杭の北側と、東側の矢板列の脇には、それぞれ長さ40㎝、幅30㎝ほどの結晶片岩の平石が置かれており、その状態は足場としての踏台を連想させるものであった。

これら矢板列や石などの機能をただちに断定することは不可能である。両脇の矢板列がごく限られた範囲にしか認められないことは、主流路全体の護岸を意図したものではなかったことを示している。西側の矢板列は支流路にともなう可能性も指摘され、その場合には支流からの流水のかさ上げを意図した堰の基底部として理解しうるのかもしれない。しかし対岸の矢板列と対向した位置に同じ範囲で矢板列が設けられている点を説明することができず、説得力に欠ける。やはり主流路中央の杭を含め、両脇の矢板列が一連の構造物として設置され機能したとみるのが妥当であろう。なおこの点については、次に述べる遺物の出土状態を踏まえて後述したい。

主流路の粘土層中からは木製の腰掛けが出土し、直下の砂層中からは石鏃、ミニチュア壺形土器をはじめ、多数の自然木、種子類、おびただしい量の土器片、サヌカイトチップが検出された（図63)。こ

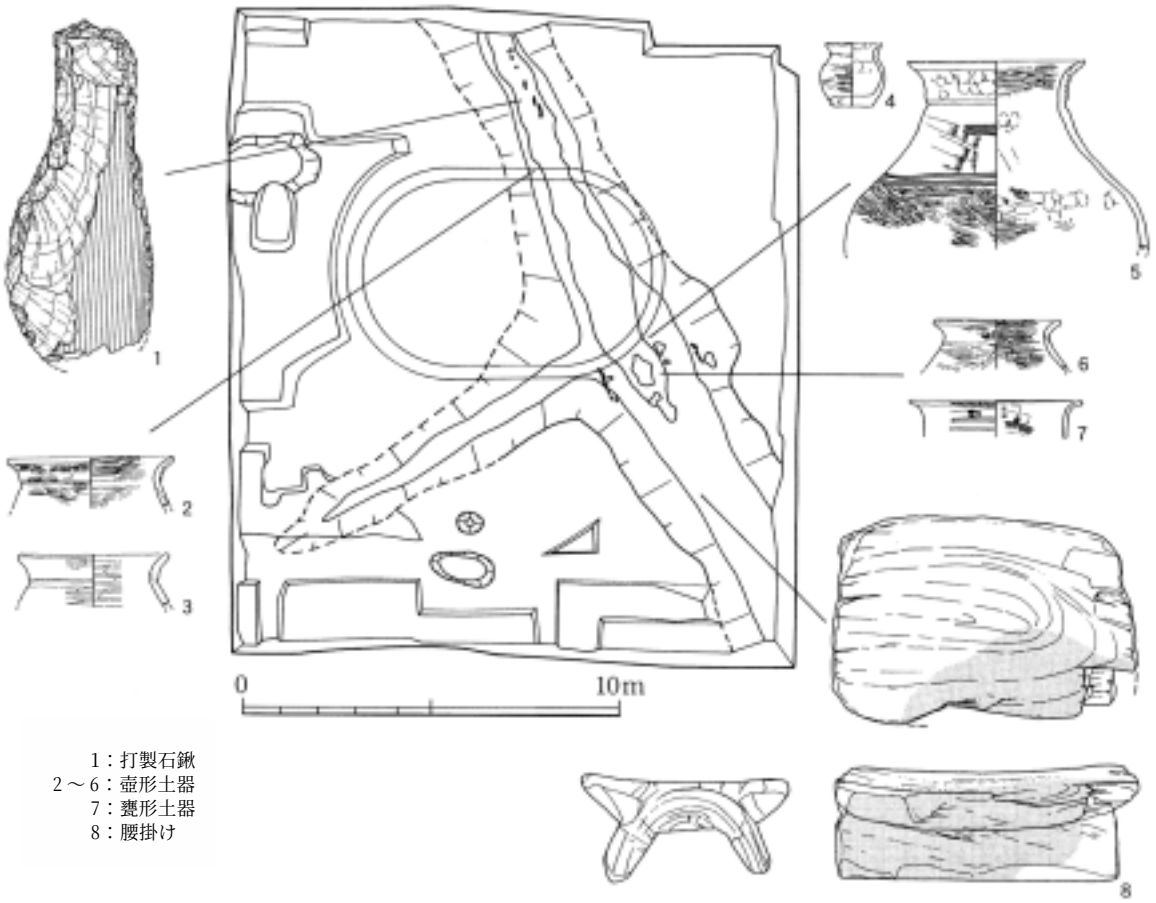


図 63　旧河道関連遺物出土地点

れらの土器類の示す年代は、ほぼすべてが弥生時代前期前葉である。このことから、本河道は当該時期のごく短期間だけ流路として機能し、その後急速に埋没したものと考えられる。

なお土器片の分布は支流路との合流地点付近、および下流側（北北西側）に集中していた。大型の壺形土器は合流点付近の河床部に破片が散乱する状態で発見され、ミニチュア壺の出土地もこの壺とごく接近した場所である。

上記のような各遺物の出土状態をみると、本流路の合流地点は日常の生活空間として頻繁に利用されたことをうかがわせる。共同の水汲み場ないし洗い場として機能していた可能性が高い。そのようにみてくると、両岸の矢板列と主流路中央部の丸木杭も、こうした日常生活における水利用とのかかわりで設置されたものと考えられよう。両岸の矢板列と中央の丸木杭の３者を結んだラインに沿って簡単な堰を設け、水溜場としたのではあるまいか。ごく小規模な水溜場であったために、両岸の矢板列は60～80㎝の範囲に設置すれば、護岸施設としてことたりたと考えられる。西側の矢板列だけが３重で堅固な作りとなっていることの理由も、支流路側からの土砂の流入を防ぐ目的であったためだと解釈すれば不自然ではない。平石２石についてはまさしく足場であったと理解できる。

なおこうした施設の類例としては最近事例が増えつつある堅果類の水晒し場がある。ただし本例が同様の機能をもつものであったのかどうかについては不明とせざるをえない。河床部付近の堆積土中において木の実の殻が数点目についたことは事実であるが、３日間の追加調査では、こうした遺物の数量を把握し出土状態を検討するまでには至らなかった。

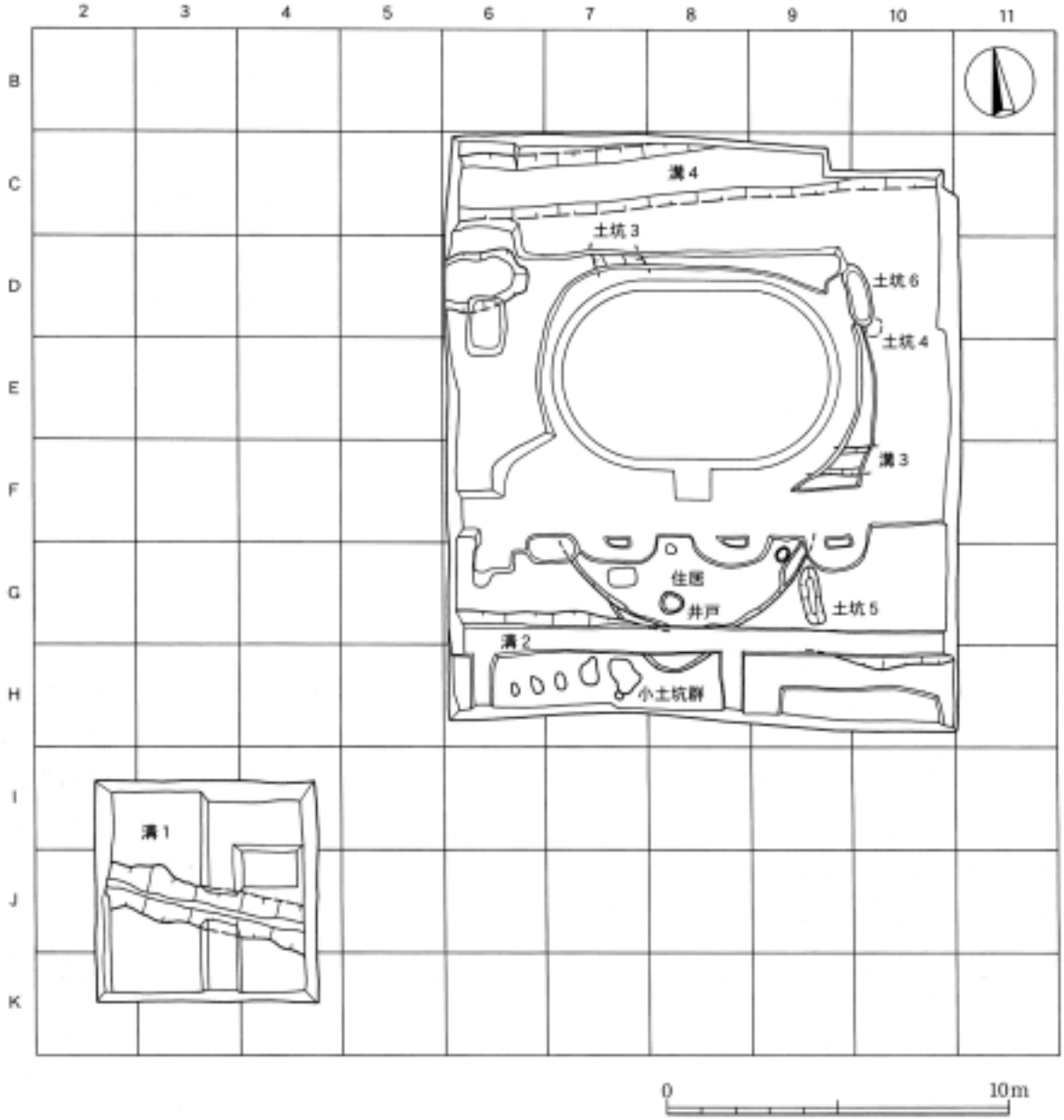


図 64　弥生時代中期以後の遺構配置

(2)　土坑

弥生時代の土坑として確認されたのは次の５基である。

土坑１　北側調査区北西部で検出された遺構である（図 65）。東半部を検出し、現状での長さ 2.3m、深さ 20cm であるが、全体の形状や規模は不明である。ただし調査範囲の西側において、床面は浅くなる状況が認められたので、長さ３ｍ程度の規模におさまる可能性も高い。

本土坑の南側堆積土下層中には壺形土器が１点、ほぼ完全な状態で埋没していたほか、その北側では土坑の底部に接して２点の壺形土器が横倒しの状態で置かれていた。３点ともに弥生時代前期後葉に属するものであり、その出土状態からみると、いずれも土坑内の床面に設置されたものと思われる。なお土坑の形状や遺物の出土状態のなどは方形周溝墓の周溝との類似性がある。

土坑２　北側調査区Ｈ７・８グリットにおいて検出された（図67）。東西に長く東側がやや広い長楕円形

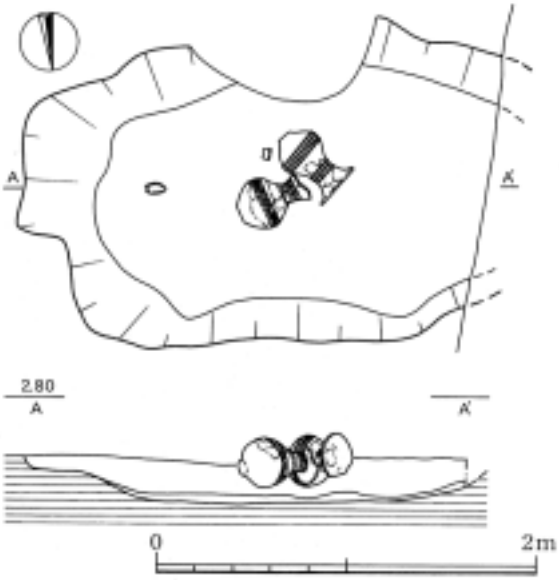


図65　土坑１の遺物

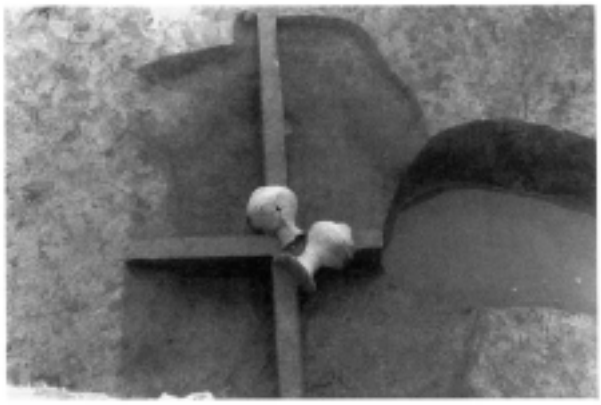


図66　土坑１

の土坑で長さ1.7m、最大幅90cm、深さ30cmをはかる。埋土は暗黄褐色シルトの均質な堆積で変化がなく、出土遺物はなかったが、層位からみて弥生時代前期後葉頃のものと推定される。

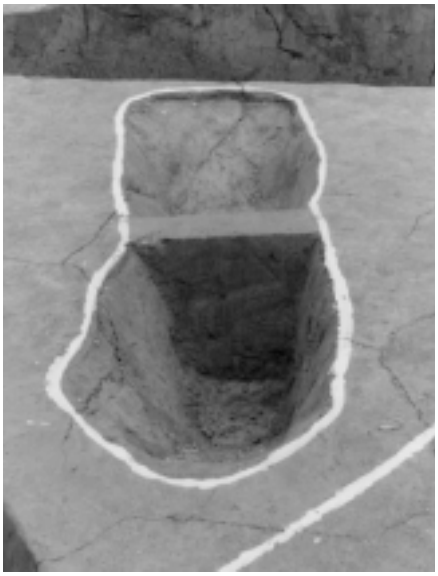


図67　土坑２

土坑３　Ｄ７グリットで検出された。撹乱のために南北両側が破壊されており、幅1.45m、深さ50cmの掘り込みであることが確認できたに過ぎない。埋土は暗褐色シルトの均質な堆積であった。埋土中からは土器片が数点出土した。土器類は弥生時代前期のものが主体である。層位からみて、弥生時代中期以降のものと推定される。

土坑４　D10グリッドで検出された。撹乱のために断面で確認しえたにとどまる。ごく小規模な掘り込みで直径50cm程度の円形を呈するものと推定される。埋土中からは壺形土器が１点出土した。土器の示す年代からみて、本土坑は弥生時代中期後半のものと推定される。

土坑５　Ｇ９グリッドで検出された。南北方向に主軸をもち長楕円形を呈し、長さ1.80m、幅50cm、深さは25cmである。底面は緩やかな「U」字形を呈する。出土遺物はなかった。層位からみて弥生時代中期以降のものと推定される。

(3)　住居

北側調査区南半部で検出された円形の竪穴住居跡である。南側約1/3の範囲が遺存しており、規模は推定径8.8ｍ、深さは現状で35cmをはかる（図68）。内部からは浅い不整円形の掘り込みが２基検出されたが、深さは数cm程度のものであり柱痕も認められなかったため、これらが柱穴であるとは断定できない。周壁溝は認められず、床面も各所に凹凸が認められ安定していない。

なお住居の東端から南側に向かって約60cmの範囲では、壁面に沿って段状に高まる部分が認められた。段の高さは10cm程度である。ただしこれがベッド状の遺構であるのか否かは不明である。

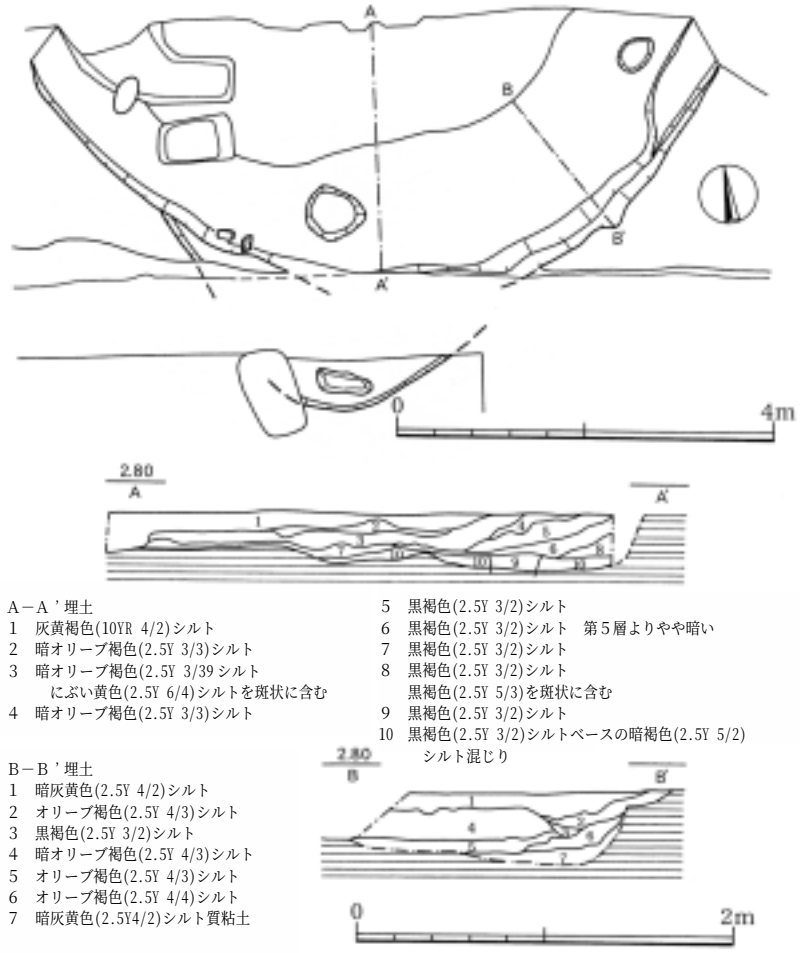


図 68　住居の状況

図 69　住居

住居の南側にはこれと切り合う形で竪穴状の掘り込みが検出された。検出時には住居によって切られていると判断したが、重複部分はわずかであり、深さも 20㎝ 程度の浅いものであったため、それ以上の所見はえられなかった。あるいは住居の出入り口等の付帯的施設であったのかもしれない。

その床面南端部付近には結晶片岩の板石１石が置かれていたが、加工や使用痕などはみられず、板石の意味は不明である。

住居内部からの出土遺物は少なく、細片が多い。ただし調査範囲の中央部やや西側付近の床面直上において甕形土器が数片に割れた状態で見つかったので、この土器をもって住居の年代の判定資料とした。弥生時代終末期に属するものと判断される。

（4）　その他

弥生時代の遺構として認定できたものは以上であるが、このほかに南側調査区の黒褐色層中から弥生時代中期後半の時期の土器類が数片のまとまりとして出土しており、接合の結果、完形に近い状態にまで復元できることが判明した。このことは、本土層中に肉眼では検出しえなかった遺構が遺物出土地点に存在した可能性を示すものであろう。これと関連し、北側調査区でも弥生時代中期後半の土器類が散見されことにも注意しておきたい。

３　弥生時代の遺物

（1）　弥生時代前期の土器

当該期の土器としては旧河道出土のものと土坑１出土の資料とがある。遺構ごとに報告をおこなうこととする。

旧河道出土土器　図 70 および図 71 は旧河道出土土器である。図 70 には壺形土器（１～35）、甕形土器（38 ～ 48）、鉢形土器あるいは無頸壺形土器（49 ～ 51）、蓋形土器（36・37）を示した。１は推定口径 18.8cm、同胴部最大径 32.2cm をはかる。口縁部と頸部との境界を接合面を利用した段で、頸部と胴部

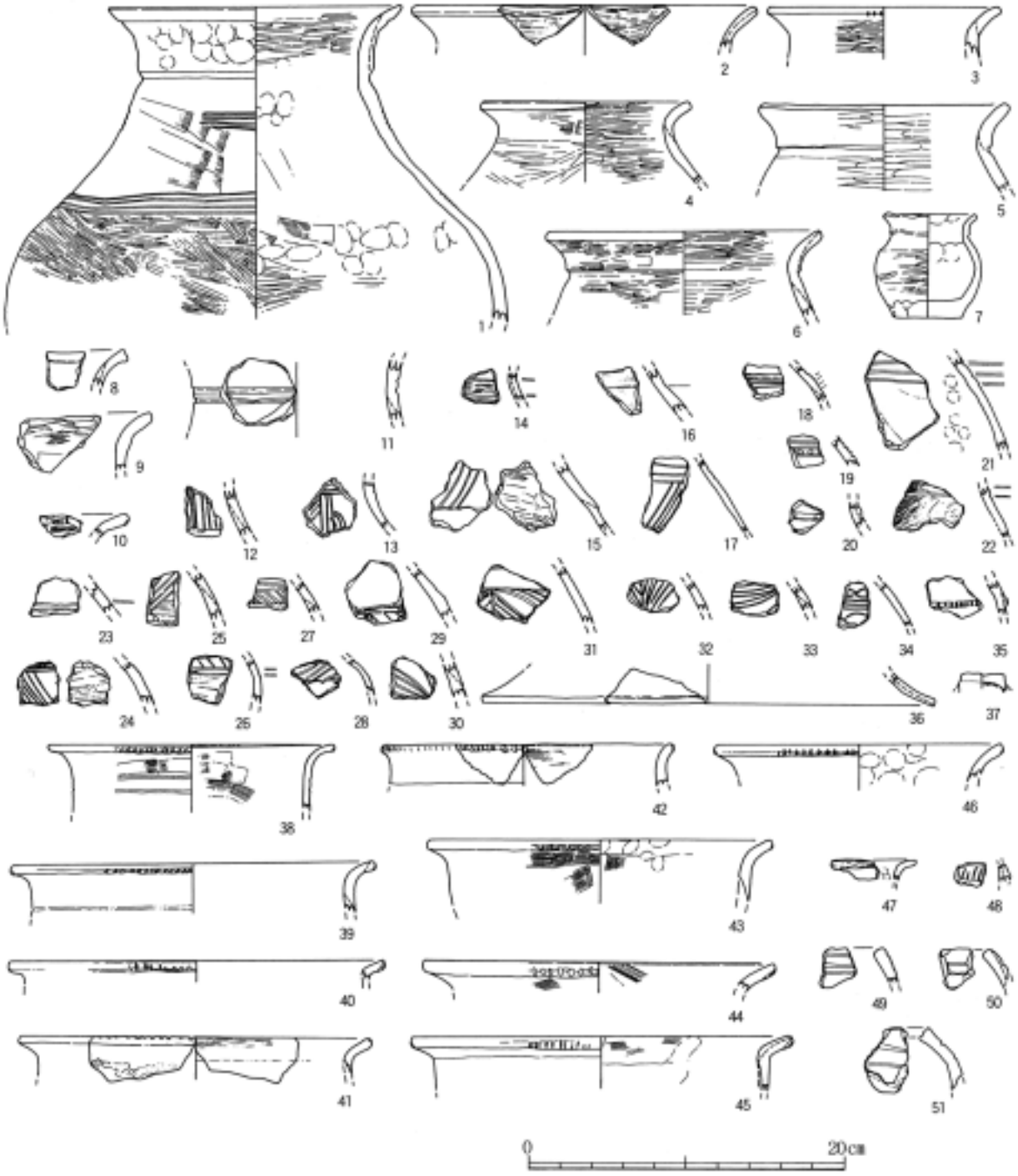


図 70　旧河道出土土器(1)

図71　旧河道出土土器(2)

の境界を４条の沈線で区分し、頸部に一部横方向の沈線を施す。また、口縁端部をつまみあげることによって細長くおさめ、直下に不明瞭な段を施す。外面はハケメのちヘラミガキ、内面はハケメのちナデ調整である。２は口縁部片で、胎土にクサリ礫を含む。3・10は口縁部外端を刻むものである。４は推定口径13.0㎝をはかり、口縁部と頸部の境界を区分する文様を持たない。5･6はそれぞれ推定口径15.5㎝・17.5㎝をはかり、口縁部と頸部を、外傾の接合面を利用した段によって区分する。また、５は胎土にクサリ礫を含んでいる。7は口径5.5㎝、胴部最大径6.3㎝、器高6.5㎝、底径4.4㎝をはかるミニチュアで、口縁部と頸部の境界に段を施す。ほかに口縁端部を面取りするもの（8・9）もある。11～23は頸部片である。縦方向の沈線（12）や山形文（15）のほか、13のように特異な文様を施すものもある。頸部と胴部の境界は段（16）やそれに沈線をくわえたもの（18）、削り出し突帯（20）などで区画する。24～35は胴部片である。山形文（24・25）、綾杉文（26～28）、木葉文（29～32）、重弧文（33）のほか、貼り付け突帯上を刻んだもの（35）もある。なお、27は結晶片岩を含んでおらす、搬入品の可能性が高い。36は甕用蓋形土器で、内面にススが付着する。37はつまみであろう。甕形土器のうち口縁部形態の確認できるものすべてが如意形口縁を呈する。38は胴部に２条の沈線を施し、口縁部外端を刻む。また、外面に黒色の有機物が付着している。刻目の多くは口縁外端を刻むが（38～40・42～46）、全面を刻むもの（41）、無刻みのもの（47）もある。48は貼り付け突帯を施し、爪による刻目を施す。色調・焼成も他の資料とは異なっており、突帯文土器の可能性がある。49～51は鉢形土器あるいは無頸壺形土器で、口縁部付近に沈線を施す。51は口縁端部に面取りを施し、１条の沈線を施す。また、49・50は胎土に結晶片岩を含まないので、搬入品の可能性がある。以上の資料は、壺形土器の段や甕形土器の口縁外端刻みといった特徴から考えて、前期前葉に属するとみられる。

図71には旧河道出土の土器の中でも特に注目すべき資料を取り上げた。1は朝鮮無文土器後期前半の粘土紐甕（片岡宏二1991）に酷似する口縁部の破片である。ただし胎土中には結晶片岩を含有し、地元で作られたものと考えられるため、系譜関係についての断定はさけておきたい。小片のため復元は確実なものではない。2は浮線文土器であろう。浮線部分が狭いといった特徴と年代的な併行関係からみて、中部高地縄文時代晩期最終末の氷Ⅰ式（設楽博己1982）に相当するものと考えられる。暗茶褐色を呈し、胎土に結晶片岩を含まないことからみて、遠隔地からの搬入品と思われる。四国では初の発見例である。

土坑１出土土器　図72には土坑1出土の土器を示した。３点の壺形土器があり、良好な一括資料をなす。

１は口径18.4㎝、胴部最大径21.6㎝、底径8.2㎝、器高26.8㎝をはかる。口縁部は大きく開くが、胴部の張りもまた著しい。頸部に３条、胴部に５条の沈線を施す。外面はハケメ調整で、胴部にのみヘラミガキを施す。2は口径24.3㎝、胴部最大径27.8㎝、底径7.5㎝、器高37.4㎝をはかる。口縁部の開きは大きく、長めの頸部・胴部を有する。頸部・胴部ともに多条の沈線を施し、それぞれ中間に竹管状工具による刺突文を施す。口縁端部は横方向に沈線を施した後、刻みを加える。外面はハケメ、内面の口縁部付近はハケメ、以下ナデおよび板ナデによって仕上げる。3は口径25.8㎝、胴部最大径25.4㎝、底径8.2㎝、器高38.0㎝で、大きく開く口縁部、長めの頸部・胴部を有する。頸部に3条、胴部に4条の貼り付け突帯を施す。外面はハケメ、内面も口縁部付近にハケメを施す。

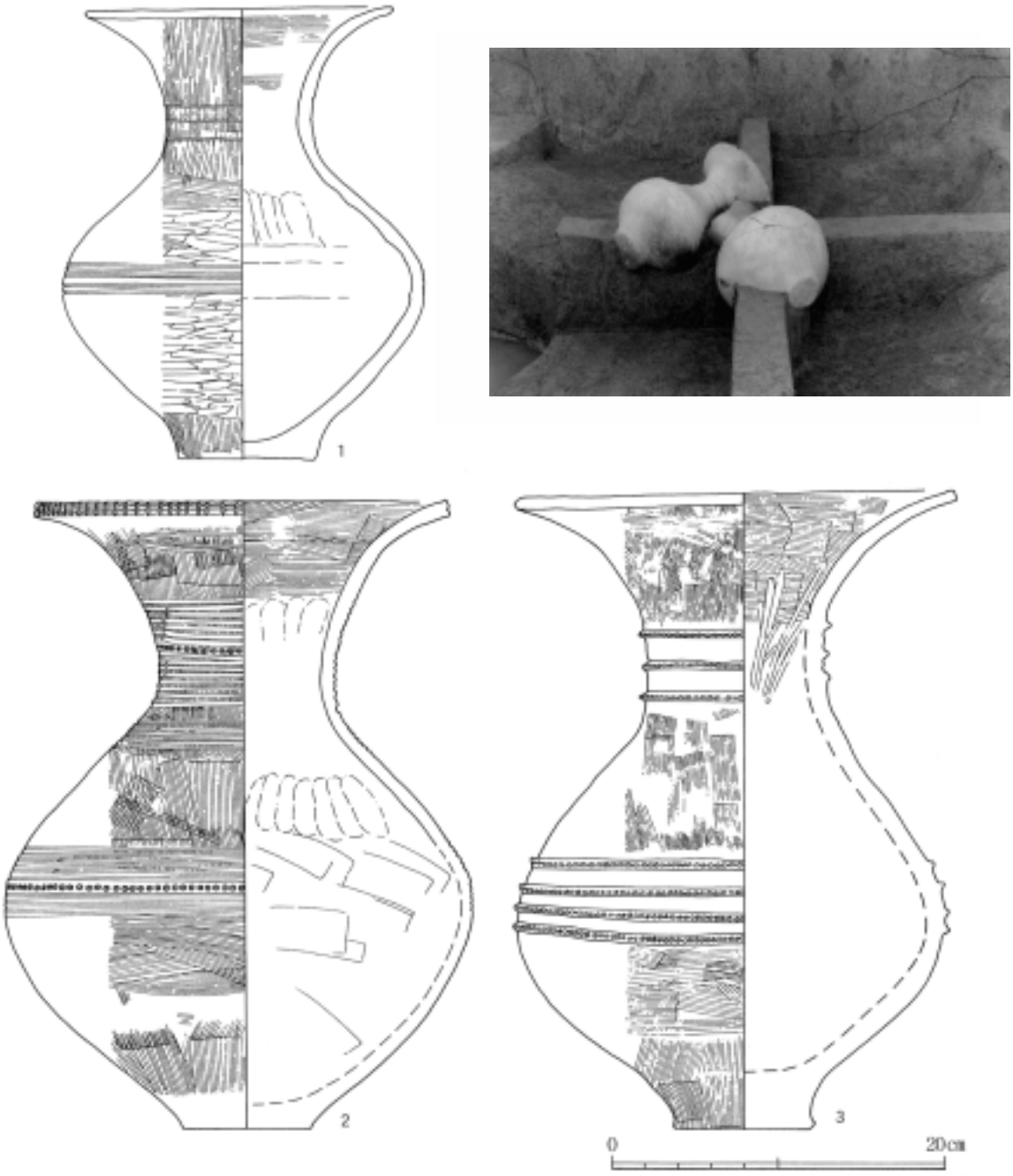


図72　土坑１出土土器

これらの資料は口縁部が大きく開き細長い器形であることや、多条沈線・貼り付け突帯といった文様の特徴などからみて、前期後葉に属すると考えられる。

（2）　弥生時代中期の土器

当該時期の土器としては壺形土器（図73-6）と高坏（図74-4）がある。壺形土器は土坑４からの出土であり、高坏は包含層中の出土である。

土坑４から出土した壺形土器は頸部以下がほぼ完形で遺存しており、胴部最大径16.1㎝をはかる。頸部のしぼりが顕著である。器面調整は外面が丁寧なヘラミガキ仕上げとなっており、胴部上半に横方向

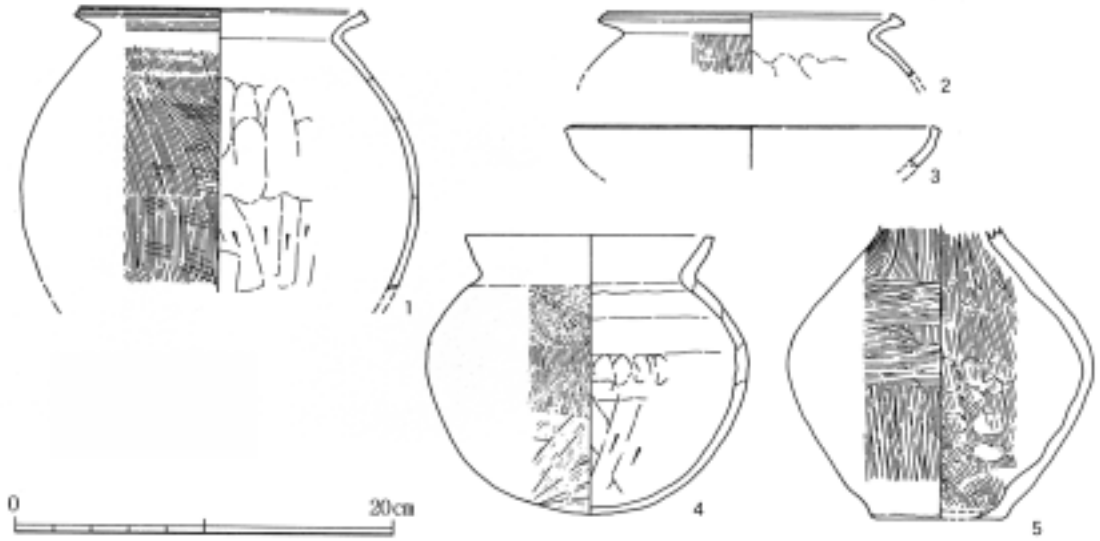


図 73　諸遺構出土土器

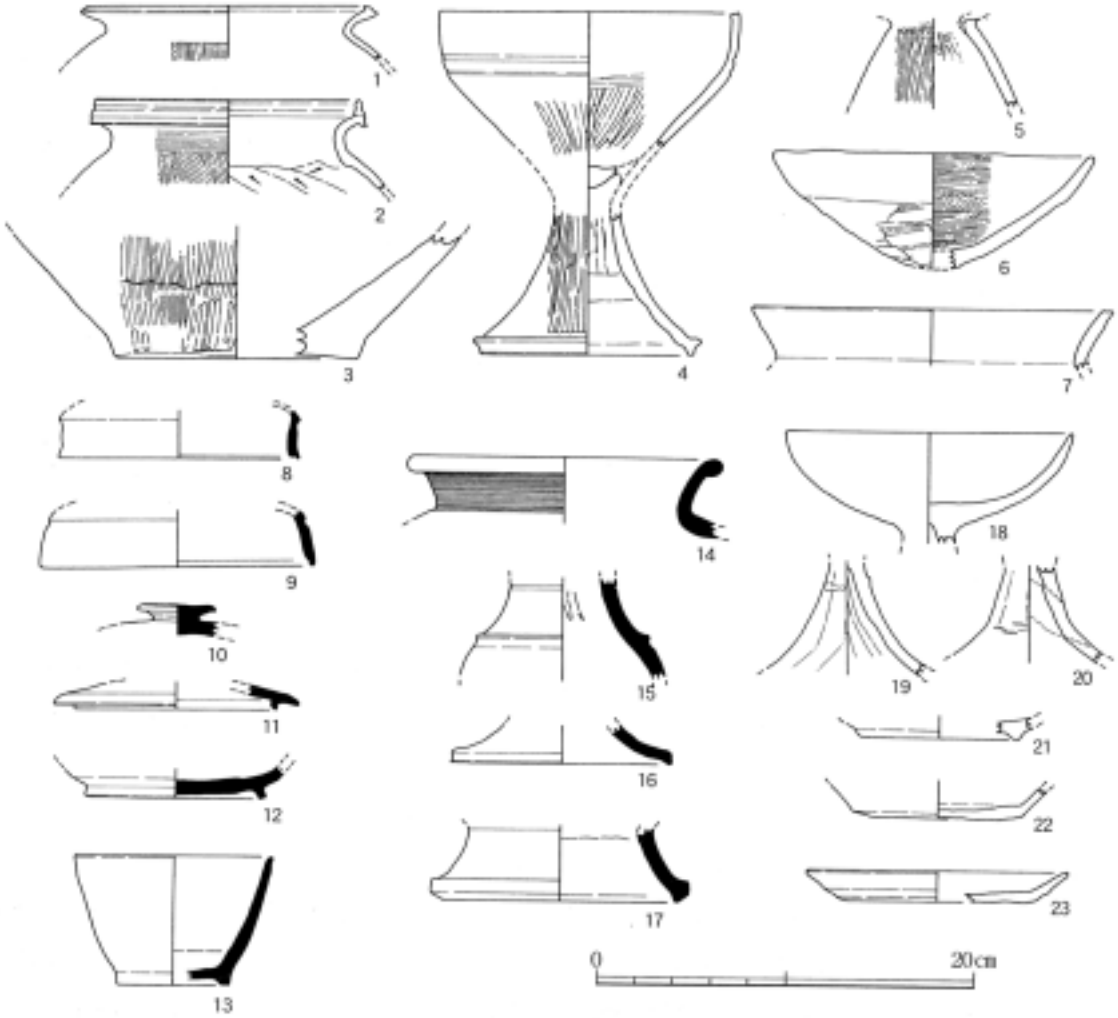


図 74　包含層出土土器

のヘラミガキを帯状に２段にわたって施す。内面は縦ハケである。中期後半に属するものと思われる。

高坏は南側調査区の黒褐色シルト層中から出土したもので、口縁部径15.6㎝、器高は推定値で18㎝となる。坏部は深く脚部との境界が不明瞭なタイプであり、坏部底部は円盤充填式である。所属年代は中期末、湯浅利彦編年（湯浅1995）の吉野川下流域Ⅵ期新に比定される。

（３）　弥生後期および終末期の土器

後期の土器として概要を知りうるものに溝１埋土上層（包含層）の甕形土器（図74－2）がある。口縁部から頸部にかけての破片で推定口径は13.7㎝になる。口縁端部は上方に明瞭な立ち上がりを示す一方、下方にもわずかに垂下させる。口縁部側面には２条の擬凹線を巡らし、内面には強いナデがおよぶ。器面調整は外面ハケメ、内面は胴部の上端付近にまでヘラケズリがおこなわれている。色調は黄褐色に近い橙色で胎土中には角尖石を含む。本例は吉備地域からの搬入品と思われ、胎土の特徴をみると備中南部足守川流域産の可能性が高い。上東鬼川内Ⅲ式（柳瀬ほか1977）に比定される。このほか図74－１・３の甕形土器も後期に属する可能性が指摘できる。１の復元口径は14.9㎝、口縁部は「く」の字状に鋭く屈曲し、端面は内側に折り曲げられ、側面には強いナデによる擬凹線が施される。器面調整は外面縦ハケである。３は底部片で大型の甕形土器であろう。後期前半に属する可能性がある。

終末期の土器としては住居出土の土器類と包含層出土の土器がある。

図73－１～３は住居出土の土器類である。１・２が甕形土器、３が鉢形土器ないし高坏である。１は口縁部径15㎝、胴部最大径および器高は推定値で、それぞれ21㎝、22㎝となり、胴部の丸みから復元される底部の形状は、尖り気味の丸底になるものと思われる。内外面の調整は東阿波型土器の典型的特徴を備えており、黒谷川Ⅲ式（菅原・大西1986）に属する。２の甕形土器は復元口径15.2㎝をはかる。成形や器面調整の特徴は１と類似しており、同一型式に属するものと思われる。３は鉢形土器ないしは高坏の口縁部で復元口径は19.7㎝、口縁端部には面取りを行う。

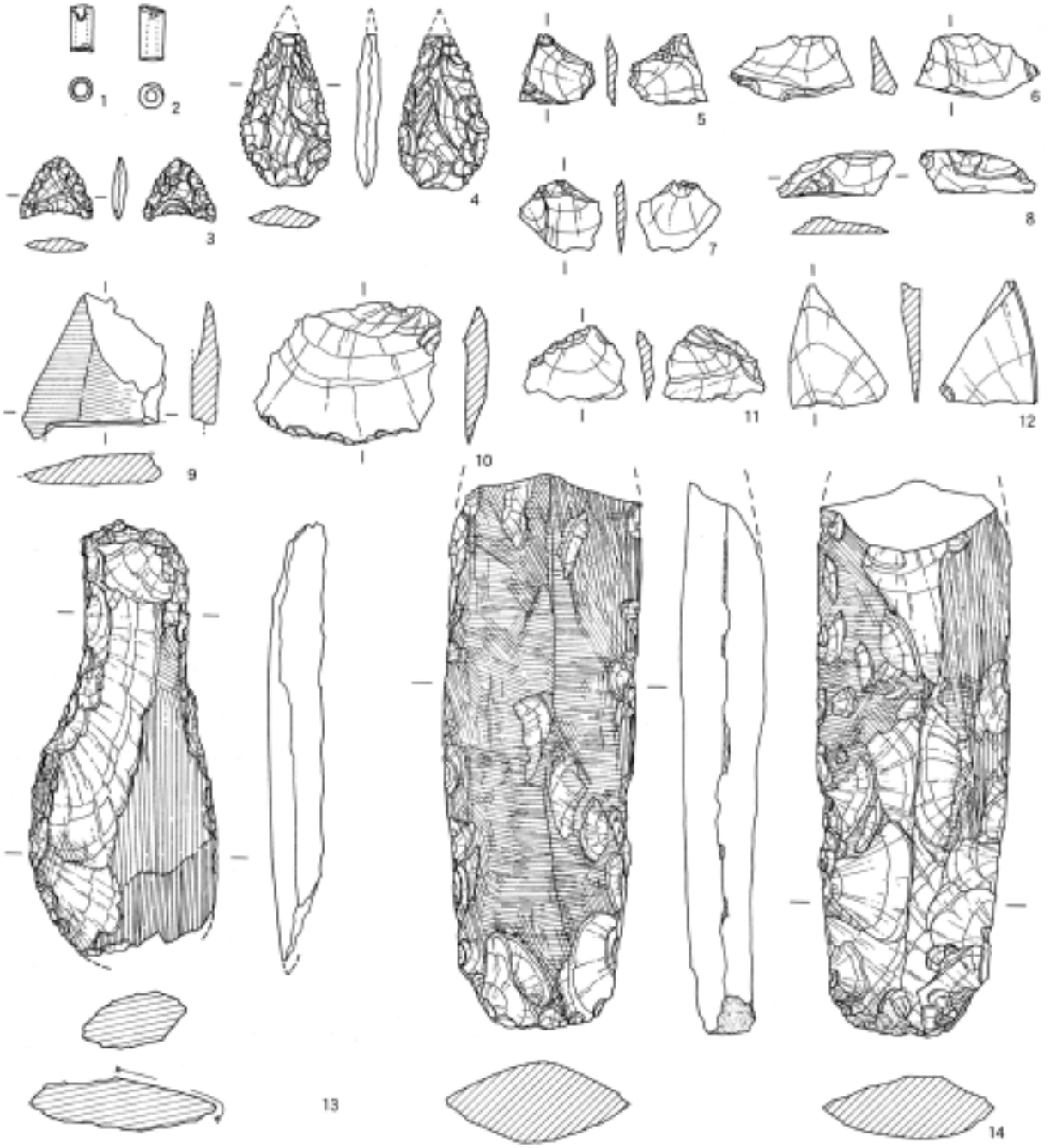
図74－５・６は包含層出土土器類のうち、当該時期に属する資料である。５は現高は4.7㎝の小片であるが、小型器台の台脚になる可能性が指摘できる。６の鉢形土器は口径16.6㎝、器高6.1㎝をはかる。鉢部の開きは顕著で底部は丸底になる。外面下半部にはヘラケズリが施され、上半部のナデ仕上げの部分との境界にわずかな段をもつ。内面はハケメ仕上げである。所属時期は弥生時代終末期と思われる。

(4)　弥生時代の石器類・玉類

石器類には旧河道出土の石鏃、旧河道埋土上層（黄褐色シルト層）出土の石製刺突武器、黄褐色シルト層中出土の石鏃２点、不明石製品（武器か）が１点、旧河道等出土のサヌカイトチップ数点がある。このほか、北側調査区近世溝からの出土品ではあるが、材質や作りからみて弥生時代の可能性が指摘される管玉２点がある（図75）。

管玉　管玉は近世の溝から２点出土している。いずれも良質な碧玉製で濃緑色を呈し光沢をもつ。１は長さ1.1㎝、幅5㎜、内孔の直径は約3.2㎜。２は長さ1.3㎝、幅5.5㎜、内孔の直径は約2.5㎜となっており、両者ともに規格は揃っている。内孔はともに両面穿孔。第６次調査時に出土した管玉類と比較すると材質はよく似ており、規格はやや大型である。これらの点から、本例は規格の点で第６次調査の出土品よりは後出的であるが、弥生時代に遡る可能性を指摘できる。

石鏃　石鏃は包含層中から２点出土している。３はサヌカイト製の打製凹基式石鏃で長さ1.4㎝、最大幅



1・2：溝４　　3：黄褐色シルト層　　4：黄褐色シルト層上面　　5・6・8・11：旧河道北半部砂層
7・12：旧河道南半部砂層　　9：住居　　10：黄褐色シルト　　13：旧河道北半部砂層　　14：旧河道埋土上層

図75　石器類・玉類

1.65㎝、重さ0.5gをはかる。黄褐色シルト層中より出土しており弥生時代前期のものと考えられる。４はサヌカイト製の打製凸基Ⅰ式石鏃で現存長3.5㎝、最大幅2.1㎝、重さ3.8gをはかる。刃部の細部調整が極めて細かく施されている。黄褐色シルト層上面より出土しており、弥生時代前期後葉以降のものである。

剥片　5・6・7・8・11・12はいずれも旧河道砂層中より出土したサヌカイトの剥片である。

刃器　10はサヌカイト剥片の一部を細部調整し、不定形刃器としたものである。黄褐色シルト層中より出土しており弥生時代前期後葉と考えられる。

磨製石器片　９は含ザクロ石塩基性片成岩製の磨製石器の破片である。刃部付近で剥離したものであるが、研磨面に研ぎ分けによる稜をもち、下端部には段をもつ。段の角は研磨されており丸みをもっている。石器本来の形態は不明であるが、石戈などの可能性も考えられる。竪穴住居より出土しているが、後世の遺構への混入と考えられる。

石鍬　13は粘板岩製とみられる打製石鍬で撥形を呈する。現存長13.5㎝、最大幅5.8㎝、重さ136.5gをはかる。刃部の一方の面は部分的に磨かれている。また、刃部先端部付近には上下方向への擦痕が観察でき、刃部側縁部近付でも基部近くまで摩滅痕が確認できる。刃部の他の一面は使用によるものか先端部が大きく剥離している。この剥離のために本石鍬の使用が放棄されたのであろう。基部は剥離によって作り出しているが、わずかに上下方向と交わる擦痕がみられ、着柄したことがわかる。旧河道北半の砂層中より出土しており、弥生時代前期前葉に属する。

刺突武器　14はサヌカイト製の大型刺突武器で刃部先端を欠損している。残存長は17.1㎝、刃部幅5.8㎝、刃部の厚み2.6㎝、基部幅5.3㎝、基部厚み2.0㎝をはかる。復元長は20～21㎝ほどにもおよぶ極めて大型のものである。刃部は両面ともに打製成形の上から磨きを施し、基部の一方の面（Ａ面）は大部分を磨き、他方の面（Ｂ面）はほとんどが成形剥離のままである。基部端には自然面を残している。Ａ面を表にしたときの刃部と基部との境の左側には小さな抉り状の細部調整が行われている。刃部の断面形は磨きによって整美な菱形を呈し、基部はＡ面側は緩やかなレンズ状、Ｂ面側は台形状を呈する。Ａ・Ｂ面ともに向かって右になる面は上下方向の磨きが顕著で、左になる面は左右方向の磨きが主である。旧河道埋土中の黄褐色シルト中より出土しており弥生前期後葉に位置づけられる。

明らかな磨製ではあるが、サヌカイト製で打製成形をベースに最終的に磨き調整を行ったものであり、通常の磨製石剣とは異なる。菱形の断面形や直線状に平行する両側縁刃部の形などは瀬戸内地域よりも、河内の中・南部を中心として近畿地方でみられるサヌカイト製刺突武器資料に共通している。弥生時代前期後葉に磨製石剣などの影響を受けつつ成立した初現期の例で、中期の打製刺突武器の系譜につながるものと考えられる。この種の大型刺突武器には戈あるいは槍として用いられたものが知られている。

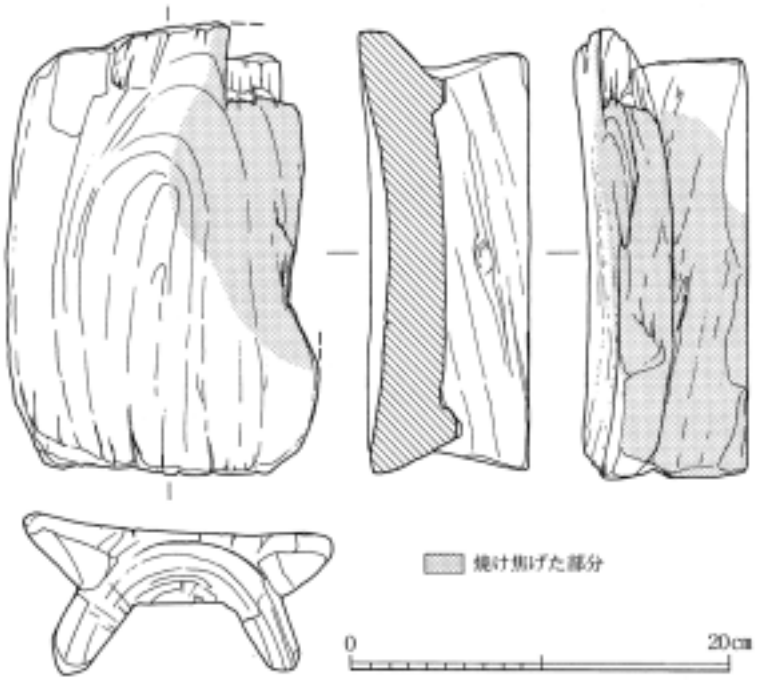


図76　腰掛け

(5)　弥生時代の木器・木製品

木器・木製品には旧河道出土の腰掛けと矢板、丸木杭がある。

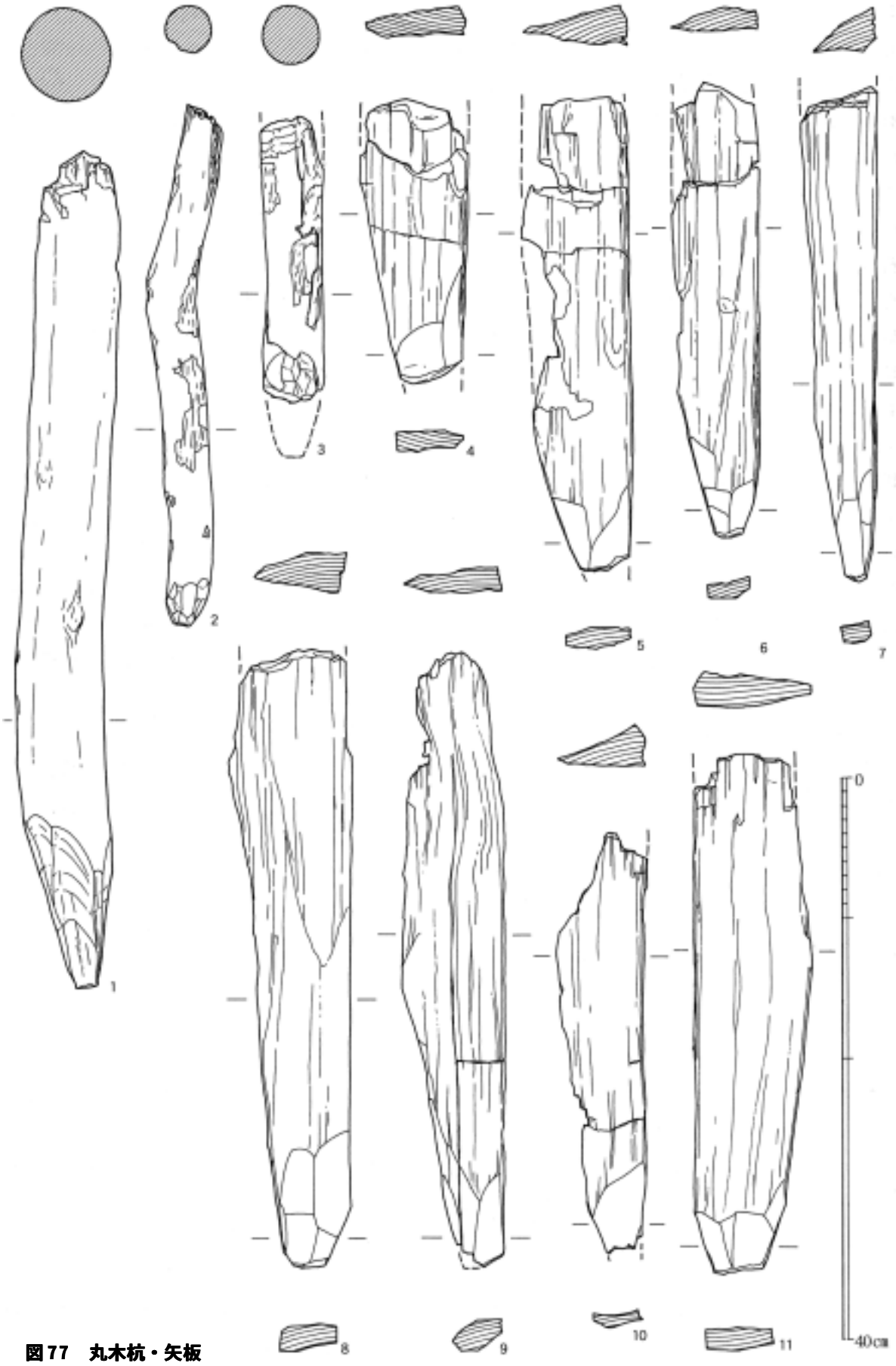


図77　丸木杭・矢板

腰掛け　出土した腰掛けはクヌギ系の広葉樹を原材とし、縦に半裁した材を刳抜いて成形されている（図76）。座面は幅23.7㎝、奥行き16.5㎝で、平面形は隅丸長方形を呈する。座面の中心部分はゆるやかにくぼみ、前面にやや低く背面に高く作られている。座面の高さは前面で7.5㎝、背面で8.5㎝をはかり、前面と背面では１㎝の差がある。座面の厚さは中心部で計測して3.1㎝をはかる。脚部は前後に２脚平行に設けられており、その側面形は「ハ」の字状に開く。加工は全体に丁寧であるが、下面にはノミ痕が観察される。前面の一部は炭化しており、火を受けたと推定される。

形態的にみると、本例は従来「案」や台付き鉢と分類されてきたものの一部と類似しており、その点を指摘して、机や容器ではないかと推測する向きもあるかもしれない。しかし本例については上面の皿状の部分がゆるやかな傾斜面になっており、形状からみても寸法の点でも座面と認定するにふさわしい。脚部の形状や厚さ、材質の強度についても腰掛けとして十分に機能しうる特徴を有する。これらの点を根拠として、本例については腰掛けと断定した次第である。

丸木杭・矢板　総計で約20本出土したが、遺存状態のよい11点を図示した（図77）。護岸用に用いられた木材には丸木杭（１～３）と矢板（４～11）とがあり、河道中央部に打ち込まれたものは丸木杭である（1）。いずれも樹皮部分は削りとられており、先端を加工して尖らせている。すべての資料は地中に打ち込まれていた部分だけが遺存したものであろうと思われ、本来の寸法は不明である。樹種については丸木杭の材質は不明、矢板はすべてスギ材である。

矢板についてみると、板の幅は最大の８で９㎝、最小の７で5.5㎝ある。先端の加工は４方向からなされており、数回から10回までにわたるはつり痕がみられる。１回のはつり幅のもっともひろい資料は10で、その幅は3.4㎝である。また５と８の先端には打ち込み時に生じたと思われる潰れが明瞭にみられる。

これら矢板のすべてに共通する特徴として注目されるのは、板材の木取りと形状である。木取りはすべて板目であり、その断面形は一方の側縁にだけ厚みをもち、もう一方が薄く尖った三角形状を呈する。また心側の板目面は表面の荒れが顕著であるものが多く、４や11にみられるように夏材と冬材との境界に沿って不整形な段差が生じている部分が目立つ。

これらの点をみると、矢板の製材にあたって採用された割材法の一端がうかがえよう。原木の年輪に沿って樹皮側から板材を１枚ずつ割りとる割材法が取られたのであろうが、その際には板の側縁となる一方の側に楔（ヤ）ないし斧を打ち込んで剥ぎ取るといった手法がとられたのではないかと推測される。

４　古墳時代の遺構

(1)　井戸

北側調査区南半部で検出した素掘りの小規模な井戸である（図78）。円形の掘方をもち、検出面での径65㎝、深さ62㎝をはかる。埋土は若干の炭片を含む暗灰色粘土の均質な堆積で、分層は不可能であった。井戸の底から数㎝上方のところから甕形土器が１個体ほぼ完形状態で出土した（図73－４）。甕形土器の型式学的位置からみて、井戸は古墳時のものであろうと推定される。

(2)　溝１

南側調査区のほぼ中央を東西にはしる溝である。検出面での幅1.3ｍ、深さは87㎝をはかる。急角度に掘り込まれており、途中から段をなして下半部は垂直に切り込まれ、溝底は平坦となる。溝内の堆

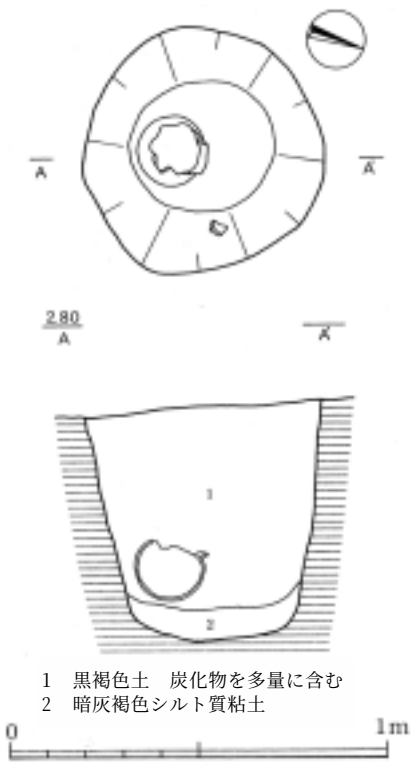


図78　井戸

積土は有機物を多量に含むシルト質粘土であり、砂層は認められない。つまり流水の形跡はなく、空掘りの溝ないし滞水状態の溝であった可能性が高い。溝内埋土の上面には、多量の土器片とともに結晶片岩の板石、炭、焼土の小ブロック、骨片などが混在した状態で溜まりをなす部分が2カ所で認められた。土器には土師器と須恵器があり、なかにはその場で破砕された状態のものもあった（図79）。整理作業の過程で、これらの土器のなかには埴輪片も含まれていることが判明した。その一方、埋土の下方からの遺物の出土はほとんどなく、細片が数点認められたにとどまる。土器類の示す年代からみて、この溝は古墳時代中期に使用されたものと判断される。

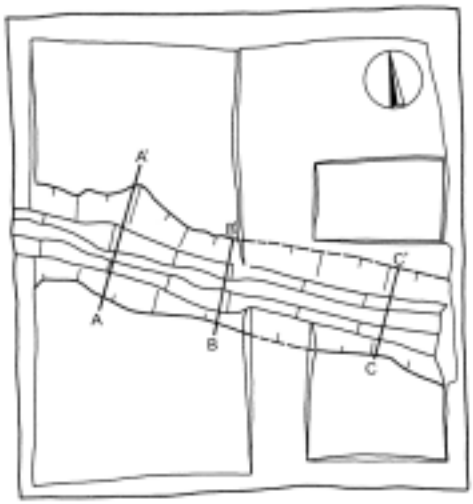
なお昭和62年度実施分の第７次調査では、本溝の延長部分において、同時期かつ同様の規模をもち、断面形も類似した溝が検出されており、その埋土中からは滑石製勾玉などの祭祀遺物が出土している。今回検出したものと一連の溝であると判断されるが、埋没過程で何度かの祭祀行為が実施された、用水路などとは異なるやや特殊な性格の溝であろうと推定される。同様の特徴を有する遺構としては集落の周囲を巡る区画溝があるので、本例も屋敷地ないしは集落内の区画溝であったとみるべきであろう。

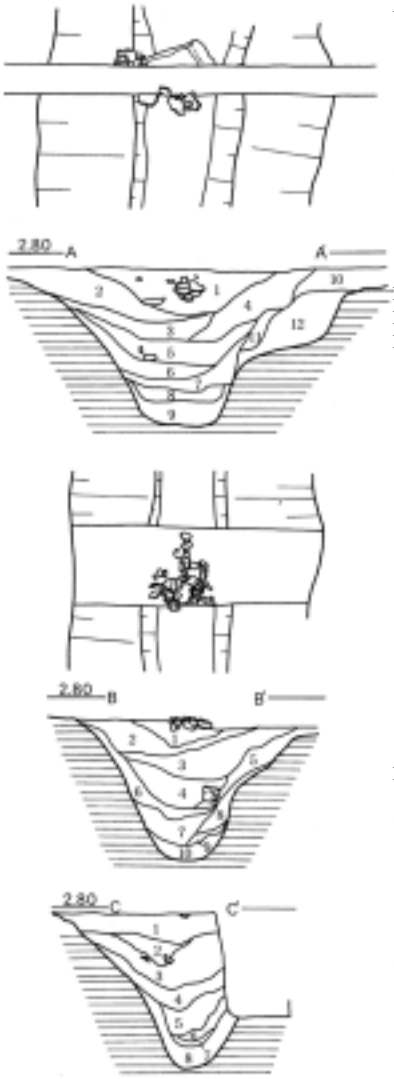
５　古墳時代・古代の遺物

古墳時代の遺物としては溝１出土の土師器・須恵器・埴輪、井戸出土の土師器がある。以下、これら遺物について遺構ごとに報告する。また包含層中には古代の資料も若干数含まれるので、それらについても後半で触れることにする。

(1)　溝１上層・中層の遺物（図83）

１～５は土師器甕である。大まかに分類すると１・５は大型、２・４は中型、３は小型と区分できるが、形態的な共通性は少ない。１は口径15.1cm、胴部最大径22.2cm、器高26.1cmをはかる。口縁部は頸部より緩やかに外反し立ち上がり、端部はつまみ上げ状に立ち上がるが丸くおさめる。胴部最大径は器高の中央より下に位置し、胴部下半部は尖り気味にすぼまる。口縁部は内外面とも横ナデ、外面上半は斜めハケ、下半部は板ナデ調整である。胴部内面は上半に斜めハケ、中央部やや下側に横ハケ、底部に斜めハケを施す。胴部中央付近には帯状にススが付着する。２は口径13.6cm、胴部最大径18.3cm、器高15.4cmをはかる。頸部は「く」の字状に屈曲し、途中口縁部に向かって外反する。口縁端部はやや外方へ張り出すが丸くおさめる。胴部は球形を呈する。口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は縦ハケ、胴部内面は上下方向のヘラケズリを行う。３は口径9.3cm、胴部最大径11.4cmをはかる小型甕である。口縁端部はやや内面に肥厚する。口縁部は内外面ともに横ナデ、胴部外面は縦ハケである。４は復元口径12.0cm、復元胴部最大径20.0cmをはかる。造りが粗雑で器壁が厚く重い。口縁部は直立気味に立ち上がる。





A－A’埋土
1　黒褐色(2.5Y 3/2)シルト
　土器・石・炭化物を多量に含む
2　黒褐色(2.5Y 3/2)シルト
　黒褐色シルトを斑状に、土器を少量含む
3　黒褐色(2.5Y 3/2)シルト
4　黒褐色(2.5Y 3/2)シルト　黄褐色シルト・土器を少量含む
5　黒褐色(2.5Y 3/2)シルト　土器・石を含む
6　黒褐色(2.5Y 3/1)シルト　黄褐色シルトを斑状に含む
7　黒褐色(2.5Y 3/2)シルト　炭化物を僅かに含む
8　黒褐色(10YR 3/1)有機質土　黄褐色シルトを斑状に含む
9　黒褐色(2.5Y 3/2)シルト
10　オリーブ黒色(5Y 3/2)シルト　黄褐色シルトを斑状に含む
11　灰オリーブ色(5Y 4/2)シルト　黄褐色シルトを斑状に含む
12　灰オリーブ色(5Y 4/2)シルトベースの極細砂混じり
　黄褐色シルトを斑状に含む

B－B’埋土
1　灰色(5Y 4/2)シルト　土器を含む
2　オリーブ黒色(7/5Y 3/1)シルト
　黄褐色シルトのブロックを僅かに含む
3　オリーブ黒色(5Y 3/2)シルト
4　オリーブ黒色(5Y 3/1)シルト　高杯の脚を含む
5　黒褐色(2.5Y 3/2)シルト
　黄褐色シルトのブロックを僅かに含む
6　黒褐色(2.5Y 3/1)シルト
　黄褐色シルトのブロックを多量に含む
7　黒褐色(2.5Y 3/2)シルト・粘土
　下面に黒色の有機質層を含む
8　黒褐色(2.5Y 3/2)シルト
　黄褐色シルトのブロックを多量に含む
9　黒褐色(2.5Y 3/1)粘土
10　オリーブ黒色(5Y 3/2)シルトベースの粗砂・細砂混じり

C－C’埋土
1　黒褐色(2.5Y 3/2)シルト　土器の破片を含む
2　褐灰色(10YR 4/1)シルト　土器の破片を含む
3　黄灰色(2.5Y 4/1)シルト　土器の破片を含む
4　暗灰黄色(2.5Y 4/2)シルト
5　黒褐色(2.5Y 3/2)シルト質粘土
6　暗灰黄色(2.5Y 4/2)シルト　黄褐色シルトを斑状に含む
7　黒褐色(2.5Y 3/2)シルト質粘土
8　オリーブ黒色(5Y 3/2)シルト質粘土

0　2m

図79　溝１の状況

図80　溝１

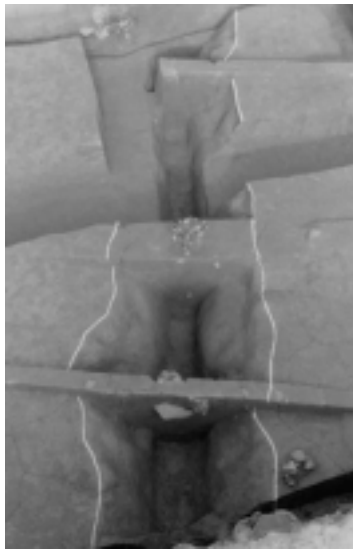


図81　溝１

図82　溝１

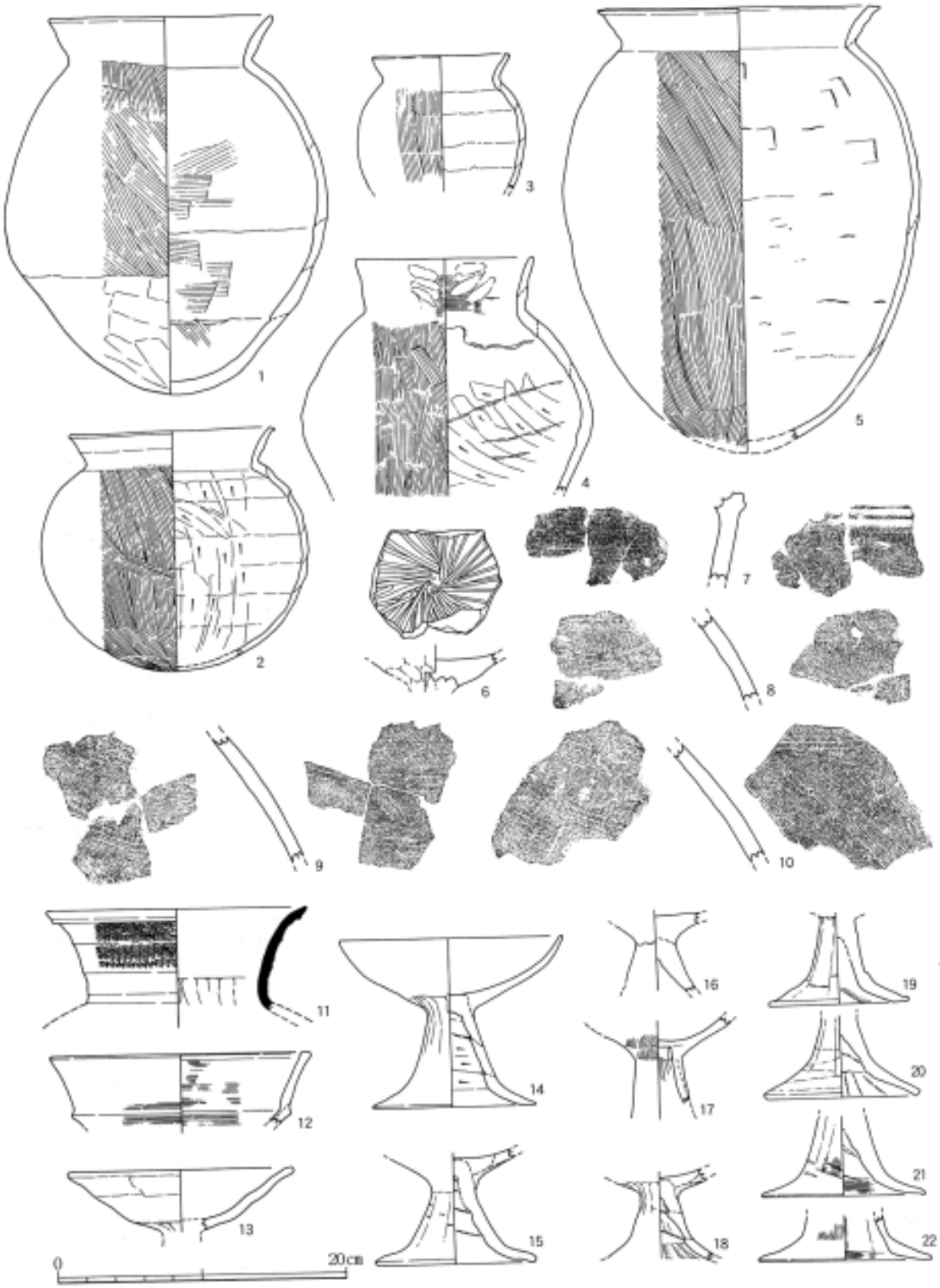


図83　溝１出土土器(1)

胴部は凹凸が大きい。口縁部は内外面ともに横ナデであるが、裂けたところを補修したような部分がある。胴部外面は縦ハケであるが粗雑である。胴部内面はヘラケズリを施すが、輪積み痕が明瞭に残る状態である。５は復元口径18.0㎝、復元胴部最大径24.5㎝、器高は推定で30.6㎝になる。口縁部は屈曲しつつ立ち上がり、端部は外方へ張り出し、上面には面をもつ。胴部は最大径がやや上半にある倒卵形を呈する。口縁部は内外面ともに横ナデ、胴部外面は縦ハケを基本とするが上半は斜めハケが多くみられる。胴部内面は粗いヘラケズリである。

６は土師器高杯の底部である。外面は横ナデ、内面はナデの後にヘラミガキを行い暗文とする。杯底部の器壁は厚く盛り上げられ、中央には棒状品を差し込んだ痕跡が残る。杯部と脚部はそれぞれ別に作り、棒を差し込み互いをつなげ、周りに粘土を盛ったものと思われる。

７～10は埴輪である。７は朝顔形埴輪円筒部最上段と考えられる。上端部にはタガがあり、タガより上部は大きく屈曲し、内傾しながら立ち上がる。器面は１次調整タテハケのち２次調整ヨコハケを行い、タガ周辺はヨコナデする。８～10は埴輪片で、比較的大きい破片にもタガやスカシなどは見られず、すべて上下方向に内湾しており、外面の２次調整ヨコハケは緩やかな弧状のカーブを描くことなどから朝顔形埴輪肩部の破片と考えられる。いずれも、内外面ともにハケメ調整で、内面は一次調整タテハケのみ、外面は１次調整タテハケ、２次調整ヨコハケを行う。ハケ原体の幅は3.8㎝で、条線の間隔はいずれも共通し同一個体とみなされる。内面にはハケの止め痕がよく残るが外面にはみられない特徴をもつ。また焼成は黒斑をもち土師質であるが良好である。８・10は内面ヨコハケ、外面は斜めハケのちヨコハケを行う。９の内面はナナメハケ、外面はナナメハケのちヨコハケを行う。外面には黒斑がみられる。その他、埴輪小片が５点出土している。

11は須恵器中型甕の頸部から口縁部で、復元口径は17.6㎝である。口縁部は緩やかに外反し丸くおさめる。口縁部外面の段および頸部の２条の段はナデによりシャープさを欠く。頸部の段の間はやや乱れるものの比較的整った波状文で埋める。調整は内外面とも横ナデであるが、内面の上半には自然釉が付着する。焼成は良好で、断面は暗赤褐色を呈する。

12は土師器高杯の杯部で、口径は15.5㎝をはかる。下半部には段を有し、口縁部は外方へ直立気味に立ち上がる。口縁端部には面を作る。内外面ともに横ナデ調整を行う。13は高杯杯部で復元径は17.3㎝をはかる。緩やかに立ち上がるが口縁部は横ナデにより外反する。外面口縁部および内面は横ナデ、外面下半は指オサエのちにナデを行う。14～22は同じ形態をとる高杯である。いずれも、脚部は直線的に開きつつ下り（上半部）、下方は途中で屈曲し「ハ」の字状に開く（下半部）。杯部との接合は、まず脚部を作りのちに脚上端部側面から杯部を接合する。杯部は椀形を呈すると考えられる。14は脚部と杯部は接合しないが全形が復元でき、杯部復元口径15.1㎝、復元全高11.6㎝、脚部高6.6㎝、脚底径11.1㎝をはかる。杯部はやや開き気味に内湾し立ち上がる。ただし、破片接合であるため傾きはもう少し内側へ傾く可能性がある。器壁は風化が著しく調整も明瞭ではないが、杯部は内外面ナデ調整である。脚部外面上半部は工具により上下方向に面取りがなされた後にナデを行い、下半部は横ナデである。内面下半部は横ナデ、上半部はヘラケズリを行っている。15は脚部高5.1㎝、復元脚底径10.5㎝をはかる。脚部外面調整は14と同じであるが、内面上半部はほぼ未調整で螺旋状の輪積み痕跡が明瞭に残る。16は杯部と脚部の接合部付近である。杯部外面はナデ、内面は工具による調整の後にナデを行っている。脚部外面は面取り後にナデを行う。内面はヘラケズリのちナデと思われる。内面中央にくぼみがあり、棒を刺したとみられる。杯・脚部の接合は杯と脚部を別々に作り、合わせて粘土を盛り上げ接合したも

のと思われる。17は杯部と脚部の接合部付近である。全体に表面が剥離しており調整が不明瞭であるが、杯・脚部ともにハケ状工具の痕跡が一部に残る。脚部上端は中空のまま杯部に接合している。18は杯部内面に横ナデが見える。脚部内面の上端付近は螺旋状の輪積み痕が残り、下半部は板ナデのち横ナデを行うが、横方向の板ナデの止め痕が放射状に残る。19は脚部はほぼ残っている。脚部高4.6㎝、脚底径9.5㎝をはかる。底部端は明瞭な面をシャープに作る。脚部外面上半部には下から上へ削った面取り痕が明瞭に残る。外面下半部は横ナデである。内面下半部は横ナデであるがその下に板ナデの痕跡が見える。20は脚部下半で、復元脚底径10.2㎝をはかる。脚部下半は直線的に広がり、脚端部には面を作る。脚部外面上半部は面取りの上をナデ、下半部はナデである。脚部内面下半部には放射状に粘土の継ぎ目が残り、粘土板を切り重ね合わせて成形したことがうかがえる。同時に布圧痕が残る。内面上半部をわずかにナデるが、甘く、絞り目や輪積み痕が明瞭に残る。21は脚部下半で、復元脚底径11.3㎝をはかる。外反しつつ広がり、脚端部はわずかにつまみ上げる。脚部外面上半部は面取りの上をナデ、下半部は内外面ともに横ナデする。脚部内面上半部はナデるが、輪積み痕が明瞭に残る。22は脚部下半のみ残存する。復元脚底径は11.8㎝をはかる。内面の屈曲が著しく、底部端は丸くおさめる。わずかに残る上半部にはハケ工具痕が残る。下半部は内外面横ナデで、内面上半部は横方向にヘラケズリを施す。

(2)　溝１下層出土遺物（図84）

１は須恵器無蓋高杯の杯部である。口縁部は緩やかに外反し丸くおさめる。体部には上から２条の稜、波状文、１条の稜をもつ。稜は丸みをもちシャープさには欠ける。波状文は継ぎ目の部分で大きく乱れている。体部下半外面は順回りのヘラケズリ、内面は横ナデである。焼成は甘く灰白色を呈する。２は土師器高杯の杯部下半である。底部と体部の境で屈曲するが段はもたない。体部外面は縦ハケ、底部外面は指オサエのち、板ナデを施す。内面は板ナデのち、放射状にヘラミガキを施し暗文とする。３は土師器高杯杯部で口径は18.2㎝に復元できる。杯部は緩やかに広がりつつ立ち上がり、口縁部付近で緩やかに屈曲する。口縁端部は外面に端面を形成するが、丸くおさめる。調整は横ナデを基本とするが、口縁端部付近の内外面はハケメ調整を行う。外面下半部は調整が粗く縦ハケが残る。脚部との接合部は横ナデする。脚部との接合は脚部を形成した後に杯部を続けて形成している。４は土師器高杯杯部で、口径17.3㎝に復元できる。口縁部と底部の境は屈曲し、外反しつつ立ち上がるが、段は有さず、口縁端部も外方へ肥厚させ丸くおさめる。内外面ともにナデ調整を基本とし、外面上端部には横ナデの上に一部指

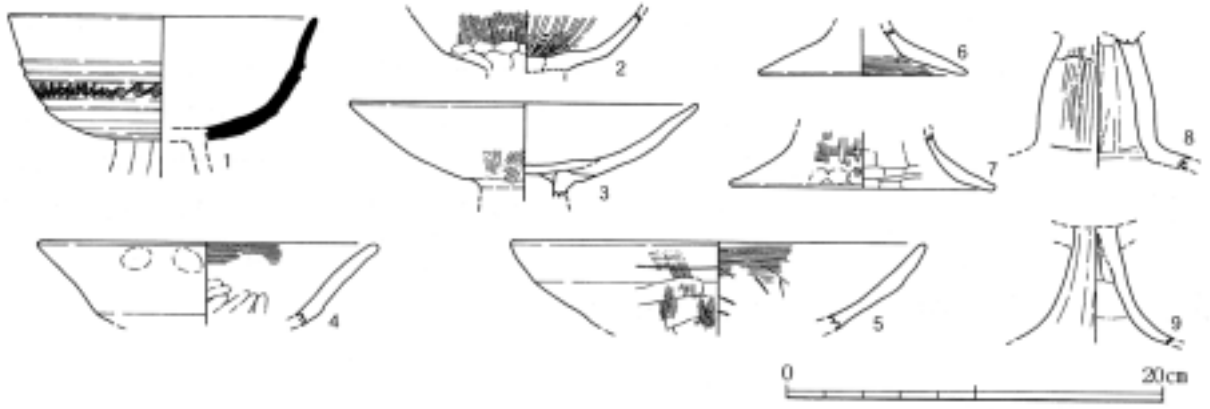


図84　溝１出土土器(2)

頭圧痕が残り、底部には縦ハケが残る。内面上端部には細かい横ハケが残る。５は土師器高杯の杯部で、口径21.5㎝に復元できる。口縁端部はつまみ上げ状に内湾しつつ丸くおさめる。調整は外面上半は横ナデ、屈曲部より下は縦ハケである。上半にも横ナデの下に縦ハケが見える。口縁部内面にはハケメ調整があり、体部はナデであるが、ナデの下に工具痕が残る。３・４・５は形態は異なるが、技法的には共通する。６は土師器高坏脚部で、脚底径は10.7㎝に復元できる。脚下半部は直線的に開き端部は丸くおさめる。外面は横ナデ、内面は粗いハケメ調整、脚部内面上半部はヘラケズリである。外面には黒斑があり、全体に褐色を呈する。７は土師器高杯脚部で、脚底径は13.5㎝に復元できる。下半部は直線的に開き、端部にはわずかながら緩やかな面をもつ。脚部外面には縦ハケが残り、端部付近には指オサエの痕跡が残る。内面下半部は横ナデ、上半部はヘラケズリを行う。８は土師器高杯脚部である。全体を輪積みで中空に作っており、上端側面から杯部を造り出していく痕跡が残る。上半部は中ぶくらみしつつ下り、明瞭に屈曲し下半部にいたる。外面上半部は輪積みし、縦ハケのち横ナデしている。屈曲部にはハケ工具痕が残る。下半部は横ナデである。内面上半部は上下方向のナデ、下半部は横ナデを行う。屈曲部には横方向に棒状工具による強い凹線状の調整がある。９は土師器高坏脚部である。脚部上端は比較的細く、緩やかに幅を広げ、明瞭な屈曲はもたない。外面上半部はナデ、下半部は横ナデ、内面は上半部中ほどまで横ナデする。上端部内面にはしぼり痕が明瞭に残る。

以上の溝１出土遺物中には、古い時期の混入と考えられるものもあるが、同遺構内の狭い範囲からの出土で極めて一括性が高く、上・中層と下層の間にも時間差は認められない。

甕は外反する口縁をもち、長胴化している。また、高杯は緩やかなカーブをもちながら開くが下半部には稜ないし屈曲をもたない杯部の布留系高杯と、内湾し深みのある杯部をもつ後期型高杯の２者を含む。土師器にみられる以上の状況は、これらの資料が米田敏幸による近畿の編年案（米田1991）の布留Ⅴ式段階併行に位置づけられることを示している。

須恵器甕は頸部に波状文が施されていること、また波状文は比較的整っていることから、TK208型式と考えられる。須恵器無蓋高杯は脚部を欠く杯部の破片資料であるが、TK208型式と考えるのが妥当と思われる。ただし、波状文が乱れること、端部は丸くおさめていること、焼成が甘いことはTK23型式に下る可能性を残す。すなわち溝１出土遺物は古墳時代中期、須恵器ではTK208型式を主体とし、やや下る可能性をもつ極めて限定された時期の一括資料と考えられる。

(3)　井戸出土の遺物

図73－４は土師器甕である。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は緩やかに内湾しながら外方へ立ち上がる。胴部は球形を呈し、丸底である。口縁部内外面は横ナデする。胴部外面上半はハケメの上をナデ、下半は板状工具でナデたものと思われる。胴部内面は上半はナデ、その下は指オサエ、ヘラケズリと続き底部は指オサエが顕著である。胴部最大径付近から下、底部中央を除く範囲に濃厚にススが付着する。底部中央の径10㎝弱の範囲は被熱しない。口縁・頸部などの形状から布留系甕とすることができるが、口縁・頸部は厚みがあり、調整も粗雑であることから、米田編年の布留Ⅳ式～Ⅴ式併行にあて、５世紀前半から中頃と考えるのが妥当であろう。

(4)　包含層出土の遺物

図74－８・９は須恵器杯蓋の口縁部片である。８は口縁端部に段を有するが、稜は低く鈍い。TK47型

式に位置づけられるであろう。９は口縁端部は面となり、稜もわずかになる。MT15ないしTK10型式に位置づけられる。

10～13は古代の遺物である。10は須恵器蓋のつまみ部、11は須恵器蓋の口縁部、12は須恵器坏の底部で、底径9.1cmに復元できる。灰白色を呈し軟質である。13は須恵器椀である。

14は須恵器甕の口縁部で、口径15.6cmに復元できる。口縁部は粘土帯を貼り付け横ナデし丸くおさめる。頸部はカキメ、口縁部内面の一部および肩部は板ナデを行う。15は須恵器の高杯脚部あるいは他の台部と考えるが、上下が逆で瑕の頸部などの可能性もある。最も細い部分に浅い沈線をもち、下へ広がったところで稜をもつ。稜から下は肥厚し内湾気味に下る。16は須恵器高杯の脚部、17は壺類の脚部であろう。脚底径12.2cmに復元できる。15～16は内外面ともナデ調整である。18は土師器高杯で、復元口径15.0cmをはかる。口縁部は緩やかに内湾しつつ立ち上がる。全面ナデ調整であるが、内面中央には不定方向の工具痕が残る。19・20は土師器高杯の杯脚部である。技法的には溝１出土品と共通する。21・22・23は古代の土師器杯・皿である。21は小片であるが内面黒色でヘラミガキを施す。

６　中・近世の遺構と遺物

(1)　溝２

北側調査区南半部ＧラインとＨラインとの境界に沿って検出された。東西方向に直線的にはしる溝で、幅73cm、深さ25cmをはかる比較的小規模なものである。埋土は数層に分層可能であるが、上面から床面にいたるまでシルトの堆積が基本であり、流水の明瞭な形跡は認められない。第７次調査における第１遺構面でも同様の溝が検出されていることからみて、それと連続する一連の溝と考えられる。出土遺物はなく年代の詳細は不明であるが、掘り込み面の層位関係や第７次調査の所見等を考慮すると、中世の溝である可能性を指摘できる。

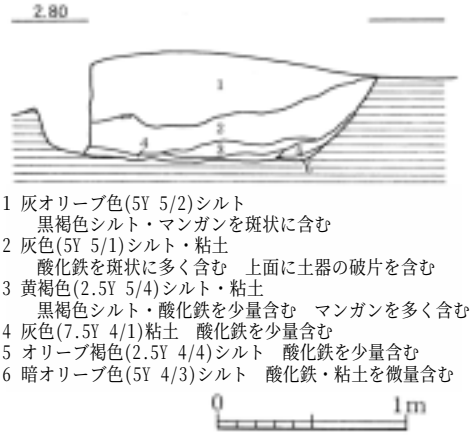
(2)　溝３

北側調査区のF10グリッドにおいて検出された。東西方向に延びる溝の一部かと思われるが、周囲の撹乱が顕著で、概要を知ることはできない。調査区の西半部でも延長部分は未検出である。幅80cm、深さ23cmをはかる。埋土は均質なシルトの堆積で流水の形跡は認められなかった。出土遺物もなかったが、規模や堆積状況は溝２と類似している。層位関係や堆積状況の所見にもとづき、本遺構についても中世のものと推定しておきたい。

(3)　溝４

北側調査区北半部Ｃラインに沿って検出された。東西方向にはしり、幅2.2ｍ、深さ60cmをはかる。上部には明治期の撹乱が及んでいたため、その除去に際して埋土のほとんどを取り去ってしまった。したがって堆積状況の詳細は不明である。

溝内からは各種の陶磁器類が出土しており、その年代は18世紀から19世紀代（江戸時代後期）に属するものと推定される。第７次調査区でも、その第１遺構面におい



1 灰オリーブ色(5Y 5/2)シルト
　黒褐色シルト・マンガンを斑状に含む
2 灰色(5Y 5/1)シルト・粘土
　酸化鉄を斑状に多く含む　上面に土器の破片を含む
3 黄褐色(2.5Y 5/4)シルト・粘土
　黒褐色シルト・酸化鉄を少量含む　マンガンを多く含む
4 灰色(7.5Y 4/1)粘土　酸化鉄を少量含む
5 オリーブ褐色(2.5Y 4/4)シルト　酸化鉄を少量含む
6 暗オリーブ色(5Y 4/3)シルト　酸化鉄・粘土を微量含む

図85　土坑６の堆積状況

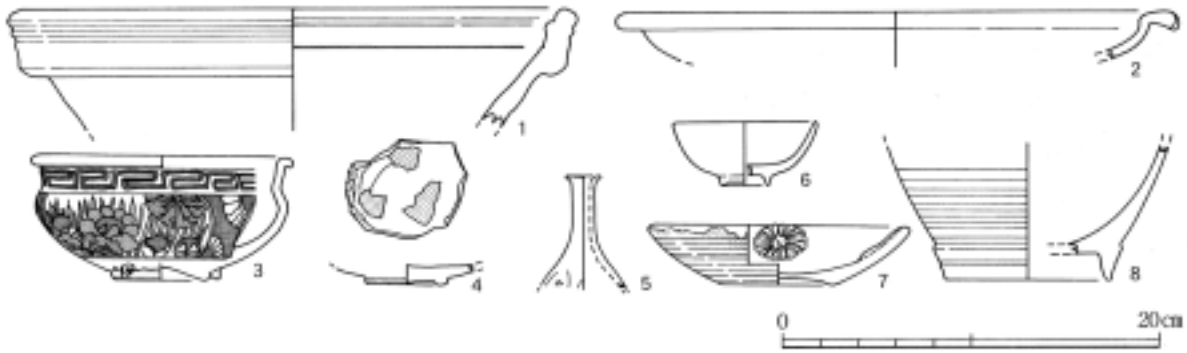


図86　近世の遺物

て同規模の溝が今回検出のものと対応する位置で検出されており、一連のものと判断される。蔵本地区一帯の条里地割りに沿った区画溝であり、用水路を兼ねていたと推定される。

(4)　土坑６

D10グリッドで検出された長楕円形の土坑で、南北長1.9ｍ、東西幅70㎝、深さ60㎝の規模を有する。その堆積状況の一部は図85に示したとおりである。下層の３層中からは瓜類の種子が多量に出土した。年代は不明であるが、層位関係からみて近世のものと推定した。

(5)　小土坑群

北側調査区H6・7グリッドで５基の小規模な落ち込みが検出された。これらの落ち込みは東西に50㎝程度の間隔をおいて東西に並んでおり、東端のものが最大で西側に行くにしたがって、規模が縮小する。遺構と判断し、小土坑群として扱ったが、性格は不明である。耕作による抉れともみなされうる。

(6)　近世の遺物

溝４出土の遺物が当該時期の資料である。図86にはそのなかの代表的なものを示した。１は堺産擂り鉢で、口径は29.0㎝をはかる。18世紀代半ばに属する資料である。２は瓦質の焙烙で口径は29.1㎝、産地は不明である。18世紀から19世紀代にかけて使用された器種であろうと思われるが、年代の詳細は不明である。３は瀬戸・美濃系色絵磁器の香炉であり、口径12.9㎝、器高は6.7㎝をはかる。19世紀代に属する。４は肥前系陶器の皿であり、見込みに胎土目が残る。17世紀前半の資料である。５・６は肥前系磁器である。５は瓶の破片で、18世紀代のものと推定される。６は小椀で口径7.5㎝、底径3.4㎝をはかる。18世紀後半代のものである。７は京・信楽系陶器の菊花文付灯明皿で、口径12.4㎝、器高3.2㎝である。18世紀後半のものである。８は大谷系陶器の徳利であり、19世紀代に属する資料である。

第３節　調査成果のまとめ

第９次調査のもたらした諸成果のうち、学術上注目すべき意義は次の諸点にまとめられる。

①　弥生時代前期前葉の水溜場の発見

旧河道の河床部に矢板列、平石などを配した施設は、弥生時代前期前葉の時期に営まれた水溜場であ

ろうと推定されるものであった。その用途としては共同の水汲み場ないし堅果類の水晒し場などの可能性が考えられるが、どちらとも断定できず、この点については保留される。ただし本例が利水関連施設であることは確実とみてよく、徳島県下では現時点における弥生時代最古の利水関連施設といえる。

こうした施設の発見例は数少ないが、初期農耕集落の多面的な実体を知る上で貴重な事例になるのではあるまいか。少なくとも庄・蔵本遺跡では近隣地帯が当時の日常生活空間の一角であったことを示す有力な証拠となる。調査地の南側には当時の墓域がひろがっていたことが第６次調査の結果判明しているので、今後、本施設の用途を考える際には墓域との関連性も考慮されるべきかもしれない。

②　弥生時代前期前葉の腰掛けの出土

列島最古の腰掛けとして、調査時にはマスコミで広く報道されたが、本例の用途は足を伸ばして実施する作業用の尻あて具と推定されるもので、実質上は機織技術の本地域への伝播に関わる資料として評価すべきものであろう。出土した腰掛けは保存状態が良好で、製作技法や使用痕などの観察にも十分耐えうるものである。今後、保存処理等必要な処置を早急に実施し、研究者や市民への公開に備えたい。なお腰掛けないし椅子形の木製品として、本例が厳密な意味で列島最古であるか否かについては、伴出土器の編年的位置づけと連動するので、今後とも比較作業が必要である。

③　弥生時代前期の石製刺突武器の出土

今回出土したサヌカイト製の刺突武器は、徳島県下で初の発見例である。調査時には磨製石剣と判断したが、材質の特異性や寸法が大き過ぎる点で通常の磨製石剣とは一線を画することや、本例が実際に剣としての使用されたとは断定できないことが指摘されたため、暫定的に刺突武器と呼ぶことにした。弥生時代における石製武器類の発展過程や地域性の出現にかんする重要資料として、今後注目されるであろう。

④　古墳時代中期の溝の検出

この遺構は先の第７次調査時に発見されたものと一連であると考えられるが、今回の検出地点と第７次調査時の検出範囲とを結ぶと、不整形ながら東西50ｍ以上にわたって延びていることがわかる。溝の断面形や堆積状況、および遺物の出土状況から判断するかぎり、これが居宅ないしは集落に附属するものであり、その外周を区画する溝であった可能性が高い。今回の調査では当該時期の住居など、関連施設を確認することはできなかったが、調査地の近隣において、古墳時代中期の拠点的集落が存在したことは確実であろう。本資料は庄・蔵本遺跡における古墳時代中期の実態解明に向けての契機ともなりうる。